
D.C. ~ refrain love stories ~

黎明龍備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C } refrain love stories }

【Nコード】

N8481A

【作者名】

黎明龍備

【あらすじ】

一年中桜が咲いている三日月型の島・初音島。いつもと変わらない春の日に、二人は出会い恋をしました。

SCENE 1

深々と桜が舞っている。

驚くほどゆったりと。

音もなく。

天使の羽のような花びらの散りざまは、まるで永遠を思わせる一瞬。

純一

ああ、オレってポエマー

雪のように積もった桜をざくざく、と踏み締めながら、ポリポリと頭をかく。

純一

冗談はともかく、根本的にこういうシリアスなノリが似合わないよなあオレ

周囲を見渡してみても遠近感がぼやけていて、終わりというものがない世界。

狂ったように桜だけが舞っている。

純一

誰の夢だ一体？

当事者が見当たらない夢も珍しい。
自我はあるが、フラフラと文字通り夢見心地で歩が進む。

純一

他人の夢を見せられる。

そんな不思議な体質をもつオレだが、超能力者や魔法使いみたいだなんて喜んでられない。

世間一般には、小説やゲームのように不思議な力を持っている人間はカッコいいと言われている。どんなに辛い境遇でも、ありきたりよりは救いがあると……。

そんな輩に声^{やから}を大にして言いたい！

他人の夢ほど面白くないものはないって……

意気込みはため息にしかならず、安眠妨害でしかない世界でさまよう。

純一

かったるいなあ…

夢なんてモノは元から支離滅裂なのに、他人様の夢なんて理解不能の極みだ。

自分の知らない人間だけで、説明不足のラブロマンスや、冒険物語を見せられておもしろいはずもない。

純一

それにしても、俺が登場してることとは、知人の夢だよな

しかも、これだけ俺が俺でいられるということは、日常に接している人物になる。

純一

こんな詩的^{ポエティック}な夢を見る人物となると、それほど数はいないから

……

指折りながら、明日折檻することになりそうな人物を数える。

純一

ふふふふ……俺の安眠を妨害することが、どれほど恐ろしいか
思い知らせて……

小指だけ立てた状態で声を失った。
導かれるように進んでいた桜の林が拓^{ひら}けて、桜の王様みたいな木が
現れた。

純一

……でか

冗談を口にするが、見る者の心を揺らす不思議な雰囲気纏っている。

目の奥が熱い。

声を失うような張り詰めた空気に、ふと、人の気配が混じった。

あまりにも非現実的な景色に鳥肌が立つ。

舞い散る桜に誘われるように、一人の少女が立っていた。

その少女は、天使でなければ悪魔であろう。

夢の少女

「ただいま、お兄ちゃん……」

純一

……

夢？

純一

……ああ、そうだ。夢だったなコレは

常識的な発言が、そもそもその通りなのだと苦笑いが浮かぶ。

本当の名前は思い出せないけれど、コイツは幼なじみの少女だ。

夢の少女

「見えないけれど、そこに居るよね？」

純一

ああ

夢の少女

「うん。お兄ちゃんを感じるよ」

思わずストライクゾーンを踏み外してしまうような、心のこもった声。

夢の少女

「コレは夢で……多分、目が覚めたら何も覚えてないだろうけど……」

少女の曇った顔を見るだけで心が痛む。

しかし、手を伸ばすことも、抱きしめてやることも、声をかけてやることすら出来ない……。

決められた夢を見るだけの、出来そこないの魔法使い

夢の少女

「約束を思い出して」

それは、そう……。

冬の終わりと、春の訪れを迎える前の夢。

この時点では意味のない

ダ・カーポのような始まりと終わりの夢…。

SCENE 2

まぶたに染み込む朝日に視覚神経を刺激され、純一は覚醒の時を迎えた。

音夢

「おはようございます、お兄ちゃん」

目を開けると、なぜか妹の音夢が間近で顔を覗き込んでいた。

純一

「なに…してるんだ？」

音夢

「先に目が覚めたから、お兄ちゃんの寝顔を見つめていたの……」

純一

「そうじゃなくて……いや、それでも良いんだけど、どうしてお前がここで寝てるんだって？」

音夢

「どうしてって……いつも一緒に寝てるけど？もう、お兄ちゃんっ
たら、ボケボケさん」

純一

……いつも一緒に……寝てる？誰と誰が？

音夢

「ねえ、お兄ちゃん。いつもの朝の挨拶…して」

そう言って、音夢が瞳を閉じる。

純一

……これも……夢？

そうだ、夢に違いない。こんな事が現実にあっていいはずがない。
いや、イイ！！そう、これは夢だ！

その瞬間、純一は
不敵になった。
無敵になった。

純一

据え膳食わぬはなんとやら。ここは、ありがたく頂戴しときましょう

純一

「っー訳で、いただきます」

音夢

「はい。」ちそうさま」

ゴスッ

純一

「ふぐっ!？」

硬い口付けとともに、食事は終わった。

音夢

「おはよう兄さん。今日もいい天気だよ」

目を覚ますと、音夢が楽しげに純一の顔を覗き込んで立っていた。

純一

「…………ガキガキガキガキ…………ガキ？」

今度こそ朝か…………そう口を動かしたのに不可解な奇声が発せられた。純一の口には、枕元にあったはずの目覚まし時計が、なぜかく見えさせられている。

音夢

「美味しい？」

純一

「……オイシイワケ、ネーダロウ」

時計を吐き出して、アゴをマッサージしながら呻く。

音夢

「何言ってるの？20年前のロボットみたいだよ」

純一

「……お前が発明したんだよ」

純一

あ、普通に声が出た

純一

「あーあー……よし。じゃ、おやすみ」

敬礼して布団にもぐりこむ。

音夢

「ちょっと、『冗談ばっかやってるとちこくするよー…』」

純一

「大丈夫だ。俺はここから教室まで瞬間移動することが出来る」

音夢

「パジャマのまま教室行ってどうするの!」

純一はむくりと起き上がった。

純一

「おはよう」

音夢

「……はあ」

音夢は呆れてため息をもらした。

音夢

「とにかく、早く起きてくださいね」

そう言い残し、音夢が部屋を出ていこうとする。

純一

「待て、音夢」

音夢

「なに？」

ノブを握りながら振り返る。

純一

「朝の日課がまだだ」

音夢

「えっ、いいよ……今日は大丈夫だし……それに時間も無いし……」

両手を胸で組み、音夢が扉に背をはりつけて首を降る。

純一

「つべこべ言わず、さっさと済ます」

音夢

「う〜〜〜」

純一の指での呼びかけに、音夢は小さく唸ってトコトコと戻ってきた。

間近で見つめる頬が真っ赤になっている。

純一

「いいか？」

音夢

「……うん」

音夢はベッドの脇で前かがみになり、腰を曲げて純一の肩に手をつく。

二人の距離は急速に縮まり、お互いの吐息を感じるまでになる。唇のシワが数えられる距離。

音夢の後頭部に手をまわし 腕を引く。

コツッ

音夢

「いたたた！」

純一

「……1・2・3・4・5」

オデコをくつつつけて熱を測る。

純一

「うん、いつも通りの微熱かな」

音夢

「うつゝ……どうしていつも頭突きになるの？」

純一

「熱を測ってるんだから、しょうがないだろ」

音夢

「ねえ、もうこれ体温計にしようよ」

デコをさすりながら音夢が呟く。

純一

「身体弱いくせに、体温計の表示をごまかす癖がなおったらな」

音夢

「むううゝゝ」

純一

「じゃあ体温計でもいいが、お前がちゃんと計ってるか、ずっと見ててもいいんだな？シャツの上のボタンを外して、首元から中に手を差し入れるところまで全部だぞ？」

音夢

「うわっ！？そんな説明しなくていいよお」

純一

「……オレだって恥ずかしいんだから諦めろ」

だいたい普通逆だろう。

少なくとも、毎日学校を休めるなら純一ならありがたいと思うだろうが。

音夢

「むう……とにかく、早くしないと遅刻しますからね」

ドアの向こうに音夢が消え、足音が遠ざかっていく。

SCENE 3

純一

「鍵閉めたか？」

音夢

「うん」

純一

「じゃあ行くか」

鞆を肩にのせ、のんびりと歩き出す。

舞い散る桜の花びらを全身に受けながら、並木道を音夢と並んで歩く。

音夢

「兄さんと並んでゆっくり歩くの、何日かぶりだよね」

スキップするように音夢が純一の前に回り込み、振り返る。

純一

「3日ぶりかな」

音夢

「もう、なに冷静に答えてるのよ」

純一

「別に慌てて答えたって仕方ないだろ？」

音夢

「別に、慌てる必要はないけど、気持ちの問題です」

諭すように、優等生な事を口にする。

純一

「はぁ………かつたるいなぁ………」

音夢

「もう、ホントだらしないんだから………」

言葉ほどには非難の色のない音夢の声を聞きながら、宙を舞う花びらに目を移す。

微弱な大気の流れにのって、ひらひらフワフワといろんな動きをしながら、窒息するぐらいの数の花びらが、地面に着陸していく。

純一

「しかし、1年中咲いてる桜ってのも、変わってるよな………」

子供のころからそれが当たり前だったから、不思議には感じないけど、やっぱり変なんだろう。

音夢

「私は好きだけどな、綺麗で」

純一

「掃除が大変だけどな」

音夢

「もう、情緒がないなあ」

その情緒の掃除のために、かなりの労力と資金が使われてるんだけどな。降り積もった桜の花びらを踏みしめながら、純一達は学園へと続く道を進む。

眞子

「音夢おはよう」

後ろから二人のクラスメートの水越眞子が声をかけた。

音夢

「あつ、眞子おはよう」

純一

「よっ、眞子」

眞子は純一を見て動きを止めた。

眞子

「朝倉！どうしたの、熱でもあるの？」

純一

「なんで？あるわけないだろ」

眞子

「だって、アンタがこんな時間にここにいるんだもん。熱があるの
かなって思って」

純一

「熱があつたらここにいないだろ」

眞子

「それもそうね」

純一

「あれ、そういえばなんでお前が萌先輩の木琴を持ってるんだ？」

今まで眞子が持っている物に気にしなかったが、それはよく見ると
木琴だった。

眞子

「だってこれ持たせてたら、叩き始めちゃって余計遅くなっちゃうか
ら」

萌

「あ……く……くん……おひゃよう……いいます……」

息も絶え絶えの水越真子の姉・水越萌が純一達に追いつく。
四人は並んで学園へと向かった。

SCENE 4

廣隆

「よっ、朝倉兄妹。おはよう」

靴から上履きに履きかえていた純一の肩を後ろからポンとたたいた。
純一が振り向くと、クラスメートの相沢廣隆が立っていた。
廣隆は朝倉兄妹と眞子と同じクラスで、純一の親友……いや、悪友だ。

眞子

「相沢、今日は早いね」

廣隆

「あのな…オレだっていつも遅刻してるわけじゃないぞ」

音夢

「兄さんと同じで遅刻ばかりだったと思いますけど」

グサッ

音夢は笑顔でキツイ事を平気で言った。

だが、音夢や眞子がそう言うのも無理は無い。

この二人は遅刻回数が多く、全校生徒の中でも1位、2位を争うと
いつでも過言では無いだろう。

純一達は昇降口で萌と別れ、教室に向かう。

杉並

「おつ、朝倉と相沢今日は早いな」

純一と廣隆が教室に入ると、二人の悪友・杉並がニカニカしながら声をかけてきた。

廣隆

「ほつとけ」

近づいてはならない奴の見本ともいうべき悪友の顔を見据える。

この軽薄さとノリで、実は学年トップの成績、しかも運動も球技全般OKときてる。

しかしこの性格からか、女の子にはモテない。

まあ、これでモテていたら友達にはなっていなかっただろう。

工藤

「珍しいな、二人とも。雨でも降らなきゃいいけど」

と、声をかけてきたのはこの四人の中で、唯一ツツコミ担当の工藤だ。

相沢

「誰かと思えば、工藤かよ。朝っぱらからキツいな」

工藤

「珍しいのは事実だろ」

相沢

「まあな」

杉並

「ところで相沢、朝倉。素晴らしい企画があるのだが、お前達も参加せんか？」

純一

「くだらない企画の間違いじゃないのか？」

杉並

「そんなことは無いぞ。『白河ことりが卒業までに何人に告白されるか？』という、素晴らしいクイズ大会だ」

杉並の言う『白河ことり』とは、この学園の中では知らぬ者がいないほどの、アイドル的存在の少女だ。

相沢

「…賭けの間違いじゃないのか？」

杉並

「何を言う。これはれっきとしたクイズ大会だ。無論、正解者には豪華景品が進呈される」

純一

「配当だろ」

杉並

「今のところ、一番人気は50〜60人というところだな」

純一

「そりゃ、凄いな」

杉並

「何と言っても、白河ことりだからな。俺は大穴で、100人は越すのではないかと思っている」

廣隆

「100人か……」

突拍子もない人数だが、彼女の人気を考えれば、不可能な気がしない。

眞子

「まったく、あんた達ってホント、しょうがないわね……」

純一と廣隆は後ろを振り返ると、眞子が蔑むような目で、こちらを見ていた。

純一

「コイツと一緒にするな眞子。俺達はまともだ」

杉並

「何を言う、MY同志・朝倉、相沢。共に戦った中ではないか」

廣隆

「いつ、どこで、何を、どうやって、誰が、なぜ？」

杉並

「先週、ゲーセンで、ゾンビ退治を、ガンを使って、俺とお前達が、教授の野望を阻止するために」

純一

「……………」

廣隆

「……………」

杉並

「……………」

朝倉&廣隆&杉並

「同志よ」

三人はがっちりと肩を組み合う。

眞子

「……………あんだ達ってバカ」

純一達ををジト目で睨み呆れ顔で呟いた。

SCENE 5

授業が終わり、昼休みになると、廣隆は席を立った。

廣隆

「朝食、昼飯はどうするんだ？」

工藤、杉並の姿はどこにも無く、どこかに昼飯を食べに行ったのだろつ。

純一

「学食か購買のどっちかな」

廣隆

「でも、今から購買に行っても売り切れてると思うけど……」

純一

「……」

廣隆

「……」

完全に出遅れた二人の昼飯は学食という選択肢しかないようだ。

純一

「しょーがない、学食に行くか」

廣隆

「だな」

二人が教室をでると、

信幸

「おー、相沢、朝倉」

と声をかけてきた。

二人が声のしたほうを向くと、二人の男子生徒が立っていた。
いなほのぶゆき さがらとしき
稲葉信幸と相楽俊樹だ。

信幸はサッカー部所属のキャプテンで、運動神経抜群だ。

俊樹は恋愛経験+なぜか人生経験が豊富、純一達の中ではよきアドバイザー的存在。

野球部に所属のキャプテンだ。

俊樹

「これからメシか？」

純一

「ああ」

純一が頷くと、信幸はちょうどいいとでも言いたげな顔をした。

信幸

「これから学食で、榊と北川と一緒に食うんだけど、朝倉達も一緒に食わないか？」

信幸の言った榊と北川とは、純一との共通の友達だ。

廣隆

「いいね。やっぱメシは大勢で食うに限るよな」

俊樹

「んじゃ、取り敢えず学食に行こうぜ」

というような話しの流れで、四人は学食に向かった。四人が学食に到着すると榊と北川が窓際の席に座っていた。

要

「よつ、稲葉、相楽。遅かったな」

稲葉達の姿を見て榊さかきが声をかけた。

榊は頭脳明晰で、杉並と共に1位の座を争うほどである。

圭一

「朝倉と相沢も一緒だったのか」

要の隣りの席に座っていた北川圭一きたがわけいちが純一と廣隆の姿に気付いた。

北川圭一は1年の時に、純一、廣隆、杉並の三人と共に年間行事には必ずお茶目なことをしかした。

そのことで純一達はブラックリストに載り、先生や風紀委員も彼らに目を光らせている。

音夢

「兄さん達も学食ですか？」

圭一の正面に座っていた音夢が、純一達を見上げた。

純一

「音夢お前も学食か？」

音夢

「たまたま学食に来たら北川君達に会って、一緒に食べようってことになったんです」

純一

お前、本当は俺達を監視しに来たんじゃないだろうな？

と、純一は思ったが口には出さなかった。
いや、口には出せなかったというほうが正しいだろう。

美春

「先輩方も一緒に食べましょうよ」

音夢の隣りに座っていた天枷美春が顔を覗かせた。
あまかせみはる

美春は純一達のひとつ下の後輩で、過激なほど音夢になつていて、
純一達からは『わんこ』と呼ばれている。

純一達は席に座った。

要

「そついはもうすぐ物理のテストだな。朝倉、相沢ちゃんと勉強してるか？」

要はカレーを一口食べて純一と廣隆に視線を移した。

音夢

「兄さん達が勉強をしてる姿が想像できますか？ 柊君」

音夢が純一達に変わって答えた。

要

「いや…想像できねえ」

純一

「だいたい、テストなんてあるのがいけないんだ。なあ、相沢」

廣隆

「ああ、その通りだ」

全員呆れ顔になる。

まあ、純一や廣隆の言い分はわからないわけでもない。

純一達が3年になって、今のクラスに慣れ始めてからまだ一週間しかたっていないからだ。

なぜこんな事になったかというと、話しは三日前に遡る。

三日前、物理担当で、純一や廣隆の担任の暦が、

「来週テストをやるぞ」

といきなり言っただのが事の始まりだ。

廣隆

「暦先生もいきなり『来週テストやるぞ』だもんな」

美春

「大丈夫ですよ先輩。そういう時にはコレです」

そういつて美春が取り出したのは、一本のバナナだった。

純一

「バナナ？」

美春

「はい。バナナパワーに頼るといいですよ」

美春はかなりバナナが好きで、どれくらい好きかというと。

要

「……美春、お前何食ってんだ？」

美春

「はえ？バナナカレーじゃないですか」

何にでもバナナを入れるほどバナナが好きなヤツだ。

圭一

「バ、バナナカレー……お前よくそんな気色の悪いもの食ってるな……」

と、要の隣りに座っていた、圭一が言った。

美春

「失礼な。バナナカレーは、専門店にもある立派なトッピングですよ。ぴりりと辛いカレーにはほのかなバナナの甘みが……」

美春は瞳をうつとりと潤ませていた。

皆苦笑いをしていたが、美春の目には当然バナナカレーしか写っていないかった。

SCENE 6

放課後

純一が商店街をぶらぶら歩いていると、ふいに後ろから肩を叩かれた。

廣隆

「よつ、朝倉。暇そうだな」

純一

「別に、そういうわけじゃ……これからどこへ行くかと、綿密な計画を練っていたところだ」

工藤

「そついうのを暇っていうんだろ」

廣隆の後ろから顔を出した工藤が苦笑する。

廣隆

「どうだ朝倉？久方ぶりに肉弾戦エアホッケーといかんか？」

純一
「エアホッケー
肉弾戦ねえ」

最近体動かしてないからな……

廣隆

「お、また『かつたりい』が出るか？」

ニヤニヤと笑う廣隆、純一はなんだかよく分からないが悔しい気持ちになって言い返した。

純一

「……誰が！よし、受けてやろうじゃねーか」

廣隆

「うむ、それでこそ漢おつこというものよ。工藤、公平を期すためだジャッジを頼むぞ」

いきなり名指しで審判に抜擢された工藤が目をしばたかせる。

工藤

「は！？お、俺が？」

純一

「そつだな、我ら共通の友人たるお前なら、厳正に勝負を見張ってくれるだろう」

工藤

「なんでそうなるかな……別に、普通に順番で遊べばいいじゃないか。ゲームなんだし……」

ちつつち、と指を振る純一と廣隆の仕草が見事ユニゾンする。

廣隆

「分かつたらんな。遊びに本気を出してこそ大人の男というものだ」

純一

「そつとも！なあ友よ」

純一と廣隆はがしりと腕を組み合った。

工藤は溜息をついた

工藤

「……ユルいんだか熱いんだか……。俺、未だにお前らがよく分か

らないよ」

困ったように溜息をつく工藤を引き摺るようにして、純一達はゲセンへと向かった。

一方、榊達はというと

圭一

「これから何処かに行くか？」

要と圭一は校門を出たところで話し合っていた。

圭一

「んじゃ……公園でも散歩するか？」

要は、何が悲しくて男と公園なんか行かなきゃならないんだ！とも思ったが、このまま帰っても何もすることがないので渋々圭一に従った。

要

「……予想はしていたが……散歩してるのは老人だけか……」

と、要は悲しそうに呟くが圭一はお構いなしに道筋から外れ、桜の林の中へ入っていく。桜の花の匂いがより強く鼻腔をくすぐる。どうやら圭一は目的があつて此処に来たらしいと彼の後を付いていきながら、そう思った。

目的地に着いたのか圭一が足を止めた。

要も足を止めると、そこは子どもの頃、秘密基地と呼んでいた場所だ。

圭一、要、信幸、俊樹、廣隆の五人が始めて出会った場所でもあつた。

要は懐かしさが込み上げて来た。

満開の桜。

何歳になるのか考えると気が遠くなつてしまいそうな、太い幹。見るものを圧倒するようで、何だか、優しくもある。

要

「……つてか、今見てもすごいなコレは」

要が桜を見上げていると、すぐ近くから歌声が聞こえてきた。

要

「……ん？歌？こんな所で？」

妖精が歌っているかのような、綺麗な歌声。

要

「誰なんだ？」

すぐ近く 桜の大木の背後へと回り込む。

桜の花びらが舞い散る中で、少女が髪をなびかせながら、歌声を奏でていた。身体が動かない。

見とれるというのは、こういうことなんだなと思いながら、ただただ歌声を感じていた。

……。

……。

……。

ことり

「……え？」

要

「……あ？」

猿の惑星で人間を発見してしまったように、二人は見つめ合う。

歌声は途絶えてしまい、今はただ耳の中に余韻として残っているのみ。

要

「……」

ことり

「……あの、いつからそこに居ました？……私、歌っていると、回りの事が頭に入らなくなっちゃうんですね」

てへへと笑って、頭をコツンと小突いた。

そんな風になると、さっきの堂々たる歌いっぷりが、何だか嘘みたいに思えてくる。

要

「3日くらい前かな」

ことり

「……えっ？……何だ、冗談ですか。それで、いつからです？」

要

「いつからっていうか、まあ、2、3分だと思うけど」

と言いつつ、時間の感覚なんてなかったので、よく分からない。
まあ、1時間ではないと思うが……。

ことり

「今の歌、10分の曲なんですよ。だから10分より長いって事はないと思うんです」

要

「ああ、なるほどな。そういやさっきも、キリのいい所で俺の事に気がついたみたいだし」

ことり

「はい」

につこりと笑う。思わずぐしゃぐしゃとやりたいくなるぐらい、人懐こい笑顔。

圭一

「要〜！」

要の後ろから恨めしげに圭一が近づいて来た。

圭一

「お前！いつ白河ことりと知り合ったんだ？」

要の首筋に腕を絡ませ、いつでも絞められるようにスタンバイをした。

要

「ていうか、俺の事覚えてる？」

要は圭一を無視した。

ことり

「え……？」

その驚きに、微妙に悲しくなる。

人から忘れられるっていうのは切ないものだ。

要は目の前の人物とまともに会話した時のことを思い出した。

……あれがまともかどうかは微妙なところだが。

SCENE 7

話しは去年のクリスマスパーティーの日に遡る。

要が体育倉庫の片隅で寝っ転がっていると、

（理由はまあ、皆の想像に任せるとしよう）

最初は太股だけだったから誰だと思ったけど、見上げた要の視線に、月明りを長い髪に反射させて、それこそ月から 別の世界から現れたように立っていた。

風見学園に知らない者はいない、アイドル的存在の少女。

要

「白河ことり」

ことり

「えっ？誰かいるんですか？」

ことりは急に声をかけられた事に驚き、辺りをキョロキョロと見回す。

要

「下であぐらをかいてるよ」

ことり

「あ、ごめんなさい。よく見えなくて……こんな所でなにしてるんですか？」

要

「自分でもそれを考えてた……でもいいのか？それこそ、こんな所で男と二人っきりで」

ことり

「？あははは。あなた、いい人ですね」

要

「悪い人だつて」

ことりは、首を横に振った。

ことり

「ううん、私には分かるあなたの感じ、いつまでも割れないシャボン玉みたい」

要は首を傾げた。

要

「なんだそりゃ？」

ことり

「屋根より高い所にあって、いつ割れてしまっただろうって、つい気になっちゃうの」

要の頭の回りには『？』が沢山浮かんでいた。

要

「よく分からないぞ」

ことり

「説明すると私もよく分かりません。うん」

ことりがひとしきり笑って頷く。
まるで普通の女の子にしか思えない雰囲気、本当に学園のアイドルなのかと疑いたくなる。

要

「まあ、俺の事はさておき……白河もコンテストに出たのか？」

ことり

「うん。ちょっと色々あって……その前に、隣にいても邪魔じゃないですかね、私？」

要

「まあ……俺の部屋じゃないし」

ことりはマツトの上に行儀よく座り、再び話し出した。

ことり

「じゃあお礼に、白河じゃなくて、ことりって呼んでいいですよ」

要

「……ことりさん、それ関係あるのか？」

ことり

「……」

要

「……ことり、それ関係あるのか？」

ことり

「全然ないですね。……で、あなたの名前は？」

要

「…………名乗るほどの者じゃない」

要はことりの質問をはぐらかして答えた。

ことり

「どこまでが名字？」

と素なのかボケなのかは分からないが、要に返した。

要

「…………どこまでだろうなあ」

ひとしきり思い出した後要はことりを見た。

要

「覚えてないか？あの、クリスマス」

ことり

「ああ、はい、クリスマスパーティーの時の」

言い終わる前に、ことりがパンと手を叩いた。

ことり

「名乗るほどの者ではないさん」

要

「……良くそこまで覚えてるな」

要が感心した。

大抵の人はあの程度の事など、忘れていても可笑しくはないのに、スゴイ記憶力だな

ことり

「記憶力には自信があるんですよ」

びしっと、親指を立ててみせる。

ことり

「でも、何であの時、名前を覚えてくれなかったんですか？」

ことりの疑問は当然だろう。

あの時『名乗るほどの者ではない』とはぐらかし名前すら教えてな

いのだから。

正確に言つと、教えられなかったというほうが正しいのだが。要がはぐらかした後、携帯電話に風紀委員の天枷美春から連絡が入った。風紀委員が中庭で杉並を捕獲したので、コンテストに参加してる音夢の変わりに護送を手伝つてほしいという内容だった。

一刻を争う事態のためにことりとはそこで別れ、中庭に向かった。要が着く前には杉並は逃走していたが。

因みにクリスマスパーティーが終わった後、要は天枷に『何故俺が杉並の護送を手伝わなければならなかったんだ』と訊いたところ、『誰にも連絡が繋がらなく、唯一連絡が繋がった榊先輩に救援要請をしたんです』と答えた。

要

「一時的な記憶喪失に陥つてな」

ことりの問い掛けをまたはぐらかした。

ことり

「それは大変でしたね」

要

「……」

ことりって、冗談が通じない？

ことり

「うう……こんなにはぐらかされるなんて、もしかして教えたくない……？」

要

「榊、榊要」

要は潔く自分の名前を教えた。

ことり

「榊君ですね」

また、ぴしつと親指を立てる。

ことり

「ええつと……」

ことりは北川に視線を移した。

圭一

「俺は圭一、北川圭一」

要の首筋に絡ませた腕を放した。

要

「で、白河ことり」

要も真似して、親指を立てた。

要

「ことりって呼ばせてもらって、いいんだっただよな？」

ことり

「ええ……くしゅん」

ふるふる、とことりが身体を震わせる。

ことり

「ずっと歌っていたから身体が冷えてしまったみたいです」

圭一

「大丈夫か？早く帰って暖かくして寝た方がいいぞ」

圭一が心配そうに言うと

ことり

「そうですね、私はこれで失礼しますね」

と答えた。

ことり

「ではでは、さよならです」

要&圭一

「ああ、じゃあな。気をつけて帰れよ」

二人は見事にバイバイと手を降る仕草がユニゾンしていた。
鼻をすんすんいわせながら、ことりは去って行った。

SCENE 8

桜並木を一人歩いている男がいた。

廣隆だ。

桜並木からは一本道で、その先には廣隆達が通う風見学園がある。端から見れば登校風景に見えるが、今日は日曜日だ。

当然、登校してる生徒は廣隆の他に誰もいない。無論彼も制服ではなく私服で登校してるのだが。

これには訳があった。

火曜日（明後日）物理のテストがあり、廣隆は珍しく、少し勉強でしようと考えたが、教科書を全部学校においてきた、という大失態をやらかしたのだ。（まあ、普段から教科書を家に持って帰れば、こんな目にはあわないのだが……）
そのため学校に取りに向かう途中だった。

廣隆

「ハア……なんで日曜に学校なんぞに来なきゃならないんだ……」

と愚痴を漏らしたが、自分の失態なのだから仕方ないと自分に言い聞かす。

昇降口に到着すると、上履きに履き替え、3年1組（自分の）教室に向かった。

廣隆

「なんか……私服で来ると、卒業生が懐かしんで学校に来たみたいだな」

誰もいない廊下を見渡して呟いた。

さすがに部活以外で学校に来る生徒はいないだろう、一名を除いて

は。

教室のドアを開けるとそこには見知った顔があった。

眞子

「あれ、相沢。何しに来たの？」

教室に入った瞬間、そこにいた眞子が珍しいものでも見るような目で廣隆を見る。

廣隆

「眞子？お前こそ何やってんだ今日は日曜だぞ」

教室には誰もいないと思った廣隆だったので驚いた顔をしている。

眞子

「私は部活の練習よ」

廣隆

そういえば、眞子は音楽部だったな

廣隆は納得したように頷いた。

眞子

「で、アンタは何しに来たの？」

眞子はいろいろ考えたが廣隆が学校に来る理由が思い浮かばなかった。

廣隆

「……ちよつと野暮用でな」

そういつて自分の席に近づき、眞子には見えないように教科書を鞆に入れた。

眞子

「アンタ教科書持って帰ってなかったの？でも、まあ、仕方ないか相沢だし」

ジト目で睨みながら言った。

廣隆

「……余計なお世話」

廣隆は教室からでようとすると思子がため息をついた。

眞子

「アンタ……私服で校内をうろついていると、浮いててカッコ悪いわよ」

冷たく言い放つ。

廣隆

「まさか日曜にこんなに人がいると思わなかったんだ」

足を止め、振り返りながら言った。

眞子

「この時期は、新入部員が入ってきたりして忙しいからね。まあ、恥ずかしいから、なるべく人に見られないように帰るのね」

廣隆

「大きなお世話だ。このやかまし女」

眞子

「な……なんですつてえ!？」

眞子は拳をワナワナと震えさせて、廣隆を睨む。

廣隆

眞子の怒りが爆発しないうちに、さっさと逃げよう

廣隆は教室を出て、一目散に昇降口に向かった。

信幸

「あれ？相沢じゃないかどうしたんだ、日曜なのに学校に来て？」

廣隆は階段を降りようとすると、後ろから信幸が声をかけてきた。

廣隆

「俺は……まあ、ちょっと忘れ物に取りに。そういうお前は何をしてんだ？」

廣隆は不適な笑みを浮かべ、まるで新しい獲物を見つけたような顔をしている。

信幸

「俺は部活だ」

信幸は、お前と一緒にするなとも言いたげな顔だ。

二人は並んで歩き、昇降口を目指す。

杉並

「お、相沢と稲葉じゃないか」

なにやら重たげな鞆を持ちながら相沢達に近づいてきた。
その後ろには圭一の姿が見える。

稲葉

「杉並、北川またよからぬことを企画してるのか？」

稲葉は少々ウンザリした様子だ。

杉並

「フ、企画ではない。部活動だ」

杉並は不適な笑みを浮かべる。

コイツが悪巧みをした時の顔だ。

こういう時に聞くとロクな目にあわない。

二人は杉並と北川との長い付き合いで直感的にそう感じた。

相沢

「そうか、がんばれよ」

杉並

「ああ」

ドリルや針金、鍵束、聴診器などが見え隠れしたが、軽くスルーして通り過ぎようとした。

圭一

「杉並、行くぞ」

何やら慌てた様子で、圭一は重たい鞆を持ち上げた。

杉並

「……今年は例年よりガードが固いな」

などと訳の分からないことを呟く。

ドドドドド

相沢と稲葉は音のする方を見ると、こちらに向かって風紀委員が走ってくるのが見える。

その先頭には勿論、音夢や美春の姿もあった。

杉並

「予想より少し早かったな」

またも意味深な発言をした。

二人は未だこの状況を理解出来ずにいたが、このままここに居たら面倒なことに巻き込まれるということは火を見るより明らかだ。

音夢

「そのの三人、おとなしく捕まりなさい!!」

相沢は『三人?』と思い周りを見渡す。

杉並、北川、稲葉……

相沢

なるほど、この三人か

しかし、相沢の考えは的外れだということに気付かされる。

美春

「杉並先輩、北川先輩、相沢先輩おとなしくお縄につくです！」

美春を始め、音夢やその他の風紀委員が相沢達三人に向かってきた。

廣隆

「……ひとまず逃げたほうが良さそうだ……な？」

相沢の隣にいた信幸に声をかけたが、案の定というか当然のように圭一や杉並と共に逃げ出していた。

廣隆もその後続く。

廣隆

「なんで俺も巻き込まれなきゃならないんだ？」

走りながら廣隆は叫んだ。

信幸

「日頃の行いが悪いからである」

信幸はキートン山田風に突っ込む。

何故キートン山田風に突っ込むんだ！と言いたかったが、今はそんなことを言っている場合じゃないということを出し、廣隆はその言葉を飲み込み、全速力で走った。

SCENE 9

廣隆

「ハアハア……な……何で俺達も巻き込まれなきゃならないんだ……」

廣隆は息絶え絶えに言った。

信幸

「ハアハア……さあな……」

信幸も息絶え絶えに言った。

あの後二人は全速力で走り、体育館裏まで逃げてきたのだ。気がつくのと杉並と圭一の二人とはいつの間にか、はぐれていた。まあ、関わりとロクな目に遭わないので、自ら進んで関わる気はないのだが。

信幸

「アイツら何やってたんだろう？」

信幸はドリルや針金等が入っていた鞆を思いだして、ふと疑問に思った。

廣隆

「テスト勉強なんじゃないか……」

意味深なことを呟く。

当然、信幸には理解不能だ。

廣隆は一昨日、音夢から聞かされた話を思い出す。

音夢の話しでは、期末テストや中間テスト、抜き打ちテストをやるときに毎年必ず問題用紙を盗み、テストの問題を掲示板に貼り付ける不逞な輩（非公式新聞部の事なのだが）がいるとの事。

信幸

「そうか……大変だな風紀委員も」

信幸は何かを悟り、これ以上追求はしてこなかった。

信幸

「まあ、それはいいとして、なんか食いにいかないか？」

廣隆は今何時だろうと思い、ポケットにしまっていた携帯を取り出しディスプレイに表示されている時間を確認すると、時刻は12時を過ぎていた。

廣隆

「そうだな、いつもの所に行くか？」

信幸は黙って頷く。

廣隆の言う『いつもの所』とは商店街にある牛丼屋のことで、純一や杉並達とよく行く場所だ。

廣隆が私服のため正門から出るのには多少抵抗があり、二人は体育館裏を通り、そのまま桜公園に出ることにした。

廣隆は隅っここのほうに目立たないように歩く。

と言っても、こんなジメジメした体育館裏には滅多に人は来ないとは思うが……。

しかし、信幸の考えは的外れの結果となった。

日陰に咲いていた草の前で銀髪の女の子がしゃがみ込んでいた。

信幸は何をやってるんだろうと思い、女の子の方に近寄っていった

が、女の子は二人に全く気付かず、しゃがみ込んでいる。

廣隆

「何してるんだ？」

信幸の隣にいた廣隆が訊いた。

女の子は後ろを振り返る。

彼女は輝く銀髪に、黒い手袋をはめ、その手には人形が握られていた。

リボンを見ると美春と同じ色で、二年生だということがわかる。

信幸

「どうしたんだ？こんなところで」

信幸が訊いたが、女の子は無音だ。

無口で、何を考えてるのかわからない。

この手の女の子は廣隆は最も苦手なタイプだ。

と、二人が戸惑っていると女の子は、はめていた黒い手袋を外した。

「ごめんよ、アリスは戸惑ってるだけさ」

どこからか声が聞こえた。

二人は辺りを見渡すが、どこにも人の気配はしない。

「僕はここだよ」

二人は女のこの方を見る。

だが、女の子は一言もしゃべってはいなかった。

廣隆はまさかと思い、人形に問いかけた。

廣隆

「まさか…お前がしゃべったのか？」

「そうだよ。僕はアリスの思っていることを代わりにしゃべっているのさ」

二人は流石に信じられない、というような顔をしている。

普通に考えれば人形がしゃべるなんてことはゲームや漫画の中の話だ現実にはありえない。

おそらくというか、絶対というか、彼女が腹話術で話しているに違いない。

「腹話術じゃないよ。本当に僕が話しているんだ」

まるで二人の考えを見透かしているかのようだ。

廣隆

「それで君の名前は？」

廣隆は腹話術かどうかなんてどうでもよくなった。

信幸は時々、あまり深く考えない廣隆の性格が羨ましくなる。

ピロス

「僕の名前はピロス」

人形が自己紹介をした。

信幸は女の子に問いかける。

信幸

「君の名前は？」

アリス

「アリス…月城アリス…」

女の子は恐る恐る答えた。

信幸

「何してたんだ？こんな所にしゃがみ込んで」

信幸はアリスの後ろに視線を移す。

そこには、草が生え、ジョウロとスコップが置いてあった。草の手入れをしていたことが手に取るようにわかる。

廣隆

「草？」

ピロス

「これは草じゃないよ、アリスが植えた花だよ」

二人にはどう見ても花には見えず、草に見える。道端に生えていたら間違えて抜いてしまうだろう。

ピロス

「この花はアリスが一生懸命手入れをした花なんだ。潰したりしないでよ」

信幸

「ああ、そんなことしないよ」

信幸が答えると、アリスはホット胸を撫で下ろす。

廣隆はそのしぐさを見てよほど大切なものなんだな、と思った。

廣隆

「時々この草の様子を見に来ていいか？」

ピロス

「抜いたり、潰したりしない？」

信幸

「しないよ」

アリスは信幸が答え終わると、草の前にしゃがみ込んだ。
どうやら来ていいって言うことなんだろう。

と二人は勝手に解釈し、体育館裏を後にした。

SCENE 10

廣隆は朝目が覚めると、憂鬱な気分になった。

今日は暦先生が言っていた“テスト”があるからだ。

廣隆

「ハア……」

桜並木を一人歩きながら本日三回目のため息をつく。

思い出さなければこんな気分にならなかったものと思う。
だが、どんなにそう思っても後の祭りだ。

眞子

「なぐにしけた顔してんのよ」

廣隆

「眞子？お前一体いつからそこに？」

廣隆は驚きの声を上げた。

無理もない、さっきまで憂鬱になっていて周りのことまで考えられなかったのだから。

眞子

「さっきからいたわよー!!」

廣隆

「へ……」

廣隆は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔だ。

記憶を呼び起こそうとするが、憂鬱の元凶である“テスト”という三文字しか出てこない。

そんな廣隆を見て眞子はため息を漏らす。

眞子

「どうせ今日のテストのことでも考えていたんじゃないの？」

さすが廣隆のクラスメートだけあって、彼の考えていることはお見通しだ。

廣隆

「いや……そんなことは……」

慌てて弁解するが、図星なのでこれ以上は言い返せなかった

眞子

「少しは勉強してきたんでしょ？」

廣隆

「……」

廣隆が無言になったのを見ると、眞子は「えっ……嘘でしょ」と問う。

廣隆

「俺が勉強すると思うか？」

と、意味もなく威張って返した。

眞子

「威張って言うな！！」

真子の鉄拳が廣隆の腹部を襲う。

廣隆を始め、純一や杉並もこの鉄拳制裁を幾度となくうけている。純一いわく、真子の鉄拳は“歩く凶器”とのこと。

廣隆

「ぐはっ」

廣隆はそのまま地面に悶え倒れこんだ。

真子

「呆れるわね、普通は予習ぐらいするもんでしょう」

廣隆

「お……俺だって……少しは勉強しようとしたさ……」

倒れた廣隆が悶えながら言う。

真子

「えっ……じゃあ、何でやってないのよ？」

廣隆は真子にやられた腹部を押さえながら立ち上がる。

廣隆

「教科書を開いたら、急に眠くなったんだ」

真子

「……」

さすがの眞子もこれには返す言葉が見つからなかった。

教室

純一

「ふあああ

」

純一の教室に入ってから発した一言は「おはよう」ではなく、大きな欠伸だった。

工藤

「朝倉……朝はおはようだろ」

工藤は呆れ顔だ。

純一

「おう工藤か……無茶言っになって……」

音夢

「工藤君、おはよう」

純一とは打って変わって元気な音夢が、後から教室に入ってきて挨拶した。

工藤

「音夢さん、おはよう」

工藤は爽やかに返した。
音夢は自分の席に座り、純一はというと寝ぼけ眼のまま席に座り、机に突っ伏した。

工藤

「何で眠そうな顔してるんだ？」

純一

「ああ……少しでもテスト勉強したほうがいいと思ってな……教科書を開いたら寝ちまった……」

工藤

「まっ……そんなことだと思った」

工藤はため息混じりに突っ込んだ。

ガラガラ

教室のドアが開き、眞子と廣隆が入ってきた。

工藤

「水越さん、おはよう」

眞子

「おはよう」

眞子は工藤に軽く挨拶すると、自分の席についた。

廣隆

「よっ……工藤……」

元氣な眞子とは正反对で、憂鬱な表情で廣隆が挨拶する。

工藤は

「さつきと似たような光景だな」

と思いながら、廣隆に話しかける。

工藤

「テスト勉強してきたか？」

廣隆

「ああ……一応な……」

廣隆は曖昧な答えをする。

実際にはやろうとして、教科書を開いたら急に眠くなって寝てしまったのだが。

眞子

「教科書開いてすぐ寝たらしいけど」

と眞子が付け足した。

工藤

「そんなことだろうと思った」

工藤は呆れ顔で答えた。

純一

「相沢もか」

純一は後ろの席の相沢に振り返る。

工藤

「似たもの同士だね」

またもや呆れ顔で突っ込む。

眞子

「ホント」

隣にいた眞子は同意した。

二人は返す言葉が見つからず、机に突っ伏した。

SCENE 11

放課後

> 純一 <

「終わった……」

物理のテストも終わり、ホッと一息をつく。

純一の隣を歩いているひろ廣隆も“テスト”という恐怖から開放されてほっと胸を撫で下ろす。

< 廣隆 >

「これでテスト勉強なんてせずに遊べる」

< 工藤 >

「お前と朝倉はいつもテスト勉強なんてしないだろ」

工藤は鋭い突込みを入れる。

確かに二人は勉強するようなタイプじゃない。

< 廣隆 >

「……………」

廣隆は工藤の突込みにも反応せず校門を凝視している。

< 純一 >

「どうしたんだ？ 相沢」

<廣隆>

「俺の目がいかれてるのかな……？校門の前にヤギが見える……」

<純一>

「何言ってるんだ？そんなところにヤギがいるわけ……」

純一と工藤も校門の前を見る。

廣隆の言うようにヤギの姿が二人にも見えた。

<工藤>

「……ヤギだ……」

なぜか校門の前にヤギの姿が見え、女の子がヤギと格闘していた。

「やーめーてー食べないでー……」

<廣隆>

「助けたほうがよさそうだな」

三人は校門の前に駆け寄る。

「十三枚目は許してー……」

ヤギは女の子の事を無視して紙をむしゃむしゃ食べる。
食べ終わると、地面に落ちていた別の紙を食べ始める。

「最後のページだけは食べないでー、私の汗と涙とその他いろんな物の結晶が……」

ひとしきり食べ終わるとヤギは一鳴きして、どこかに消えていった。

三人は落ちていた原稿用紙みたいなものを集め女の子に手渡した。

<工藤>

「これ君のだよね？」

「はい…、ありがとうございます……」

<工藤>

「大丈夫？」

地面にへたり込んでいる女の子に声をかけた。

「大丈夫です……」

女の子は顔を上げて力なく答えた。

<廣隆>

「大事なものだったのか？」

「はい…大事なげんこ…げふん。書類で……」

<純一>

「直せないのか？」

「いえ…徹夜すれば……」

<工藤>

「徹夜？」

「今日は6時間ぐらい寝れると思ったのに……」

<廣隆>

「もっとちゃんと寝たほうがいいぞ」

女の子はハッと気付き、慌てて口を閉ざす。

「今の聞こえましたか？」

<廣隆>

「ばっちり」

「あの…えっと…何でもないです……」

<工藤>

「僕達でよければ直すの手伝うよ」

「本当ですか…ありがとうございます」

女の子はパッと表情が明るくなり、深々と何回も頭を下げる。

<廣隆>

「そっいえば、自己紹介がまだだったな、俺は三年一組の相沢廣隆だ」

リボンの色を見ると三年だということが解るが、名前と何組かまでは解らない。

<工藤>

「同じく一組の工藤叶」

<純一>

「さらに同じく一組の朝倉純一」

「三組の彩珠です。彩珠ななこ」

三人は原稿用紙のことが気になったが、深く突っ込まないことにした。

SCENE 12

<杉並>

「よっ、朝倉」

純一が教室に入ると、杉並が声をかけた。

<純一>

「何だ杉並か……」

<杉並>

「何だとは随分冷たいな朝倉よ」

悪友の杉並を無視して自分の席に座る。

<杉並>

「今朝方職員室で重要な情報を入手してきたんだが……」

<廣隆>

「へー、どんな情報なんだ？」

廣隆が純一の席に近づいてきた。

<杉並>

「実はな、二組と三組に転校生がやってくるらしいんだが」

<純一>

「転校生？」

<廣隆>

「どんなヤツなんだ？」

純一とは逆に興味津々の廣隆が訊くと、杉並は待つてましたと言わんばかりの顔をする。

<杉並>

「なんでも二組は帰国子女らしい。三組は大和撫子タイプだそうだ」

その頃三組では

担任の先生が転校生の女の子と教室に入ってきた。

いつもと同じ一日の始まり。

普通の学校の、普通の教室の、普通のHR。ただ一つ違っていたのは……

「みんなに新しいクラスメートを紹介する」

静かだった教室が一斉にざわめく。好奇心と期待の視線が、教壇に集中した。

教壇の前に『新しいクラスメート』なる者が立つ。

どこか古風な、おとなしい感じのする女の子だった。中々の美少女だ。

信幸

「結構可愛い子じゃないか？」

俊樹の隣の席に座っていた信幸は椅子を近づけ、小声で話し掛けた。

俊樹

「そうだな……」

俊樹は興味なさそうに言う。

女の子は恭しく頭を下げ、自分の名前を名乗った。

胡ノ宮環このみやたまきという、いかにも？和風といった名前だ。

自己紹介が終わると、環は辺りをキョロキョロと見回し始めた。

「胡ノ宮どうした？」

環

「あの……相楽様は……？」

担任の先生が俊樹の方を見る。それにあわせて、環も俊樹の方を見た。

環は俊樹から目を離さない。クラス中の視線が自然と俊樹に集中する。

特に俊樹の隣の席に座っている信幸は彼を凝視している。

「相楽とは知り合いだったのか？」

環

「はい、あの……私、相楽様の許婚なんです」

俊樹

「は?????」

教室を衝撃が駆け抜けた。

一斉にクラス中がどよめく。

信幸

「お前も隅に置けないな俊樹」

俊樹

「……いや、俺はその子のことも、許婚の話も何も知らないんだ」

教室では、突然の許婚宣言に誰もが驚き、ヒソヒソと会話している。

「詳しいことは休み時間に確かめるんだな。じゃ授業を始める。胡ノ宮、席について」

環

「はい」

なめるように見つめるクラスメート達の視線の中を環は歩いていき、教室の一番後ろの席へと歩いていった。

SCENE 13

杉並

「よし、噂の帰国子女とやらを見に行こう」

一時間目の講師が教室を去ったのと同時に、杉並が朝倉の席に寄ってきた。

純一

「は？」

音夢

「え？」

なんだか寄ってきたパート2も、純一の鏡ののようにとぼけた表情を浮かべる。

杉並

「は　　って、何を驚いているんだ朝倉兄妹？」

音夢

「いえ……杉並君が、そういうミーハーなイベントに興味を持っているなんて知らなかったから」

音夢が取り繕うように微笑む。

杉並

「なんだミーハーってのは？売れない芸人コンビか？」

杉並はボケて返してきた。

純一

「そのボケにはつつこんでやらんが、珍しいを通り越してるな」

転入生が可愛い女の子と聞いて男子が動き出すのは目に見えていたが、杉並だけは以外だった。

杉並

「いやいや……この時期に転入してくるなんて、何か陰謀の匂いがあるだろうが。それに帰国子女というのはラスボスっぽい。つまり未知だ！！」

音夢

「……はあ」

音夢はため息をつき呆れたような表情を浮かべる。

純一

「まあ、お前はまず自分を研究し尽くしたほうがいいと思うが……陰謀って何をするんだ？」

どうやってたら、こんな学園で陰謀を張り巡らせられるんだろうか？

と、純一は考え及んだが唯一出来そうなヤツが目の前にいる事を思い出した。

杉並

「ん？テストでオレをTOPの座から落としたり、購買のパンを独り占めしたり、実は誰かのメイドさんだったり」

純一

「……最後のだけは切実だな。特に料理」

純一は吐き捨てるように杉並の隣にいた音夢は引き攣ったような表情を浮かべる。

音夢

「兄さん……何か含みがある発言が耳に届きましたけど？」

純一

「いや、別に」

ただ単に、朝倉家の食生活が絶望的だなんて一言も含んでいないし、悟られてはいけない。

純一

「で、お前はどうしたんだ音夢？」

杉並を無視したくて、投げやりに話をふる。

音夢

「あ、いえ……なんだか先程から嫌な雰囲気を感じるといのか……」

純一

「電波の受信が良くないんじゃないか。それなら屋上に行ったほうがいいぞ」

そついうと純一は頭上の触覚を指差す。

音夢

「これはテレビのアンテナじゃありません!」

杉並

「寝癖　ぐっ!？」

鼻っ柱を押さえて杉並がうずくまる。

音夢の神速の裏拳が見事に決まったからだ。

純一

「バカだな……女性の髪は命よりも大切だと言っのに」

音夢

「兄さんがそれを言いますか」

頭の触覚を撫でながら音夢が小声で睨む。

と、杉並が机に手をつけて立ち上がる。

音夢

「どうなさったの杉並君？」

杉並

「くっ……やはりお前の周囲には時空の断層が展開しているのか？」

純一

「んなわけないだろうが、それはそこにいる悪魔が……ん？」

純一が言い終える前に廊下から猫のような鳴き声が聞こえてきた。

音夢

「なに？」

杉並

「猫か？」

なんだか廊下がガヤガヤと騒がしい。

純一

「なんだろうな？」

三者同様、疑問符を浮かべた表情で廊下を覗きにいく。

音夢

「……なんだろう、あのただかり？」

音夢の指差した先には、主に女子を中心とした嵐が生じている。

「うにゃ、わわ！？引つ張るな〜〜〜！」

嵐の中心に女の子がいるみたいだが、背が低すぎるらしく、突き上げられた手が辛うじて見え隠れするだけだった。

杉並

「あれが噂の転入生かな？」

純一

「だろうけど……凄い人気だな」

「どいて〜！……どけや〜〜〜〜〜！！！」

純一

「ん？何かどこかで聞いた事があるような声だな」

音夢

「あれ、兄さんも？」

眉を寄せて、音夢も小首を傾げて考え込んでいる。

純一

「何だろう……この聞くと反射的に逃げたくなる声は……」

音夢

「何だろうね、これ」

杉並

「おい、二人共ボサツとしてると巻き込まれるぞ」

杉並の声に反応して教室に非難しようとした時、ふと人垣の中に懐かしい小動物を見た気がした。

純一

「え？……さくらんぼッ！？」

「お兄ちゃん！？」

波をかきわけて、ひょっこりと見知った顔が飛び出してきた。

さくらんぼ、そう呼ばれた少女の名は“芳乃さくら”。

6年前まで朝倉家の隣に住んでいたが、突然アメリカに引っ越した子で、純一や音夢の幼なじみだ。

さくら

「やっぱり、お兄ちゃんた〜」

ばっ、と風を切る音でも立てそうな勢いで、さくらが飛び込んでくる。

ビシッ
！

さくら

「……痛い」

飛び込んできたさくらを押しとどめるように、その額に音夢の左手が押さえ付けた。

杉並

「見事なカウンターだ」

称賛する杉並。

一方、見事にカウンターを入れた音夢はというと、

音夢

「おほほほ……はぁ」

わけの解らない笑い声を上げて、ため息をつく。

さくら

「痛いよ音夢ちゃん」

音夢

「ああ、ごめんごめん、なんだか身体が勝手に……」

純一

「いや、待て」

音夢を押しつけて前に出る。

純一

「お前、本当にさくらんぼなのか！？妹とかじゃなくて」

純一

「あ、懐かしいねその呼び方」

紛れもなく、有り得ないことに、さくらんぼの大きさは、別れた6年前のままであった。

純一

「この未知なる生物は知り合いか朝倉兄妹？」

一人だけマイペースだった。

純一

「お、俺はロリコンじゃないぞ杉並」

パニックだった純一が否定する。

無理もない、6年前の姿のままで幼なじみにあえたのだから。

純一

「兄さん現実逃避しないで。間違いなくさくらちゃんだよ」

純一同様、パニクる音夢。

純一

「いや、待て音夢！いくらなんでも同じ年には見えないぞコレは！」

『コレ』と差し出した指が、頭上の虚空を指して所在をなくす。

体裁を整える意味を含めて、その手をポン、とさくらの頭の上に置く。

さくら

「人の身体的な特徴でけなすの嫌い……でも、お兄ちゃんは好き」

ぎゅっ、と腰というか太股にさくらが張り付く。

さくら

「ねえ、お兄ちゃん。まだ信じてくれないの？せっかく帰ってきたのに“おかえり”は？」

純一

「君もふざけるのは止せ。さくらの妹か親戚だろう？」

さくら

「ボクはボクだよ」

純一

「証拠でもあるのか？」

さくら

「んっつと、……今は何も持ってないけど……あ、二人だけの秘密でね、昔お兄ちゃんが女の子のスカートを」

ビシッ
！

誘拐犯な気分で、さくらの口を塞ぐ。

純一
「……」

純一は恐る恐る音夢の方を振り返る。

音夢
「……」

杉並
「……」

音夢は殺気を放ちながら純一を睨んでいた。

純一
「……あ……ボク、勉強しなきゃ」

カクカクと教室に戻ろうとしたところで、ドアから眞子が顔を覗かせる。

眞子
「一体なんの騒ぎなの朝倉？」

純一
「わ」

いきなり教室から眞子が出て来て驚いて言った一言だ。

眞子

「輪？」

純一

「……若気の至りなんだよ！」

眞子

「知るか！」

ピシャ、と教室のドアが閉められた。

SCENE 14

純一

「許婚？」

学食に来ていた純一達一行は六人席に座り、今朝方三組での“許婚宣言”で話題は持ち切りだった。

信幸

「ああ」

信幸は事の顛末を話し終わると、一同の表情を窺う。

朝倉兄妹は驚きの表情を浮かべ、杉並は相変わらずマイペースだ。

廣隆に到っては俊樹を羨ましげに見ていた。

当事者の俊樹はというと、興味なさげにうどんを一口啜る。

俊樹にとって幸いだっただのは、この場所に圭一がいないということだ。

もし、圭一がいたら杉並と組み追及の手は緩めないだろう。

純一

「あの子に見覚えはないのか？」

俊樹

「無い」

素っ気なく返した。

廣隆

「実は俊樹が記憶を無くしてるとか」

俊樹

「俺の頭の中のハードディスクをフル回転させたが、検索結果該当ナシ」

杉並

「ふむ……ミステリーの臭いがするな。非公式新聞部の出番だな」
等と訳の解らないことを呟き、ふと何かを思い出したように純一を見て、不適な笑みを浮かべる。
まるで、ハンターが新しい獲物を見つけたような目だ。

杉並

「今朝の未知なる生物は知り合いか朝倉兄妹？」

信幸

「未知なる生物？」

杉並

「二組に転入した子だ。見た目からして未知なる生物でな……」

廣隆

「朝倉の知り合いか？」

廣隆は杉並の話を遮る。

純一

「まあ……アイツが本当のさくらんぼなら、直にわかるぞ」

音夢

「どついつ事？」

純一

「……」

ずずずとうどんのスープを飲み干し、ため息をつく。

純一

「どうしてか、かくれんぼでアイツに勝てた試しがないんだ……あんな風に」

指差した食堂の入り口では、さくらが団体を引き連れ、キョロキョロと辺りを見渡していた。

さくら

「あつ、こら、ボクはお兄ちゃんを探してるだけで、そんなのいらな　うぎゃー！」

餌付け感覚なのか、さくらに食べ物をあげようと皆が寄り添って渦を形成している。

純一

「……取り敢えず俺は消える」

そついうと純一は音も無く、まるで忍者のように食堂から姿を消した。

杉並

「では俺もそろそろ次の任務に移るか」

意味深な発言を残し食堂を後にした。

信幸

「だけど、ずっと俺達は俊樹と一緒にいるけど、そんな話、初めて聞いたぞ」

信幸の言う“俺達”とは廣隆、要、圭一、信幸の四人の事だ。

俊樹

「だろうな、俺も初めてだ」

廣隆

「あのなあ」

信幸

「おい、俊樹」

俊樹

「え？」

信幸

「噂をすれば影……だ」

信幸は顎をしゃくって食堂の入口を示した。

廣隆達がゆっくりと信幸の示す方を振り向くと、ちょうど入り口から、

話題の主であった環が入ってくるところだった。

不意にキョロキョロと辺りを見まわし始める。

音夢

「誰かを探しているのかな？」

信幸

「俊樹の事を探しているんじゃないか？」

俊樹

「違うだろ」

俊樹は否定した。

食堂に入ってきた時に環と一度目があつたのだ。彼女は食堂内を見渡せる位置までくると、環の様子を見てみると、なんだか切羽詰まったような感じがする。

もし本当に俊樹を探しているなら、目があつた時真つ先にココに飛んでくるだろう。

それをしないということは、お目当ては俊樹でな無いということになる。

俊樹がぼんやり見つめていると、彼女は目的のものを見つけたかのように立ち止まった。

音夢

「あ、動きが止まった」

そして次の瞬間

環は突然自分の制服に手をかけると、勢いよく脱ぎ捨てた。

ふわりと制服が宙を舞い、その下から純白の着物と深紅の袴が現れる。

言い方を変えるなら巫女服姿の環が現れる。

その様子を見ていた四人はというと。

音夢

「!!」

音夢は絶句し、

俊樹

「ぶっ

!？」

俊樹は食べていたうどんを嘔き出し、

信幸

「え!……」

信幸は驚きの表情を浮かべ、

廣隆

「なっ!……」

廣隆は驚きのあまり、スプーンをカレーの上に落としてしまった。

信幸

「あれって……」

廣隆

「神社の巫女さん……だよな？」

その通りだった。

背筋をピンと伸ばした環が、どういつ訳かは解らないが……巫女装束で、しかもこの風見学園の食堂に立っている。

俊樹

「そういえば家は神社だとか言ってたな……」

音夢

「でも、このシチュエーションには全く関係ないでしょ？」

信幸

「朝倉さん…制服の下にあんなかさばる服が着れるもんなの？」

音夢

「私に訊かないで、稲葉君」

一体どこから取り出したのか、環の手には弓が握られ、矢をつがえたままキリキリと弦を引き絞っている。

俊樹

「弓？これから狩りでもするのか？というか、どこから取り出したんだ？」

音夢

「だから私に訊かないで！」

食堂内にいる皆が彼女の想像外の行動に呆然してるいと、矢はヒュン！！と音を立てて放たれ、近くにいた男子生徒の井を貫通し、見事に真つ二つに立ち割った。

廣隆

テレビのロケか？

廣隆は思わず辺りを見回したが、勿論カメラなどどこにもなかった。

ドッキリでもないらしい。

食堂内はシンと静まり返っている。

その場にいた全員の視線が環に集まっているが、それは仕方ないだろう。

彼女は時代劇か、格闘ゲームに出てくるヒロインのように、巫女装束に弓を持った姿で立ち尽くしたままだ。

もともと、一番驚いたのはいきなり矢で射られた男子生徒だろう。彼は真つ二つになった井を、ぼーっと放心したように眺めていた。

環

「申し訳ありません、ちょっと手元が狂ってしまって……お騒がせしました」

環は深々と頭を下げた。

信幸

「手元が狂った……ねえ」

信幸は訝しむ。

音夢

「思いつきり故意に見えたのは私だけ？」

俊樹

「同じ疑問を持ったやつは、この食堂の客と同数いるはずだ」

俊樹は環を見つめたまま答えた。

手元がどうの云々以前に、食堂の中で矢を放つ事事態が異常なのだ。

廣隆

「で、今の何？」

俊樹

「俺に訊くな」

環

「あら、相楽様」

俊樹達に気付いたらしく、環は弓矢を手にしたまま笑顔を浮かべて近寄ってくる。

その表情は、とても常軌を逸した行動を取ったばかりの人物とは思えなかった。

俊樹

「よお、胡ノ宮」

環

「そちらの方は？」

環は廣隆と音夢に視線を移した。

まだ転校初日で、しかも別のクラスなのだから知らないのも無理はない。

俊樹

「一組の相沢廣隆と朝倉音夢さんだ」

音夢

「は……初めまして、胡ノ宮さん」

何とか平静を保ちながら答えるが音夢の声はわずかに上擦っている。

そんな様子に気付いているのかいないのか、環は平然としたままだ。

環

「先程は大変失礼を致しました。まさかあんな大騒ぎになるとは思いませんでした。親が決めた許婚という事でしたので、わたくしとしても気になりました、本当にお騒がせしました」

につこりと微笑む環は、今の状況を全く気にした様子がない。ならば、臆することはない。

彼女に訊きたいことがあった。

この際はつきりさせた方がいいだろう。

俊樹

「あのさ……親が決めた許婚ってどういうこと？俺は胡ノ宮は勿論、胡ノ宮の両親にも会ったことがないんだぜ」

環

「実はわたくしにもよく分からないのです」

俊樹

「分からない？」

環

「わたくし……幼い頃の記憶を失っているのです」

環はそう呟くように言うと、そつと目を伏せた。

彼女の説明によると、生い立ちは勿論の事、住んでいた場所や遊び相手のことなど、全て思い出せないらしい。

母親は環と朝倉の間には、深い絆があるのだと言った。

俊樹

「つまり……どんな絆か分からないけど、俺と環には何か深い絆があり、それで許婚になったと？」

環

「わたくしも母に尋ねたのですが、どういう意味か教えてくれませんでした。ただ、相楽様に会えばいずれ分かることだから……と」

だが実際にはこうして二人が会っても、何も分からない状況に変化はない。

環はこの学園で俊樹と共に一緒に過ごし、答を見つけないのと言う。

環

「身勝手に掴みよのない話であることは承知していますが、どうかよろしく願います」

俊樹

「まあ、よろしくな」

廣隆

「さてと、俺達お邪魔虫は退散しますか」

そういうと、廣隆は立ち上がる。

その後に続くように信幸と音夢も立ち上がり、食堂を後にした。

SCENE 15

<信幸>

「彼女のことどう思う?」

廣隆と共に桜並木を歩いていた信幸は唐突に訊いてきた。

<廣隆>

「彼女? 何だ稲葉、彼女でも出来たか?」

廣隆が茶化すと、

<信幸>

「違う! 転校生の胡ノ宮だよ胡ノ宮!」

と、つつこんできた。

<廣隆>

「胡ノ宮? お前、まさか胡ノ宮の事が……」

<信幸>

「だから違っつて!!」

廣隆の言葉を遮る。

<信幸>

「お前知っててワザとやってるだろ」

<廣隆>

「ごめんごめん」

さすがにこれ以上茶化すのは無理と判断し、素直に 素直かどうかはわからないが 謝る。

<廣隆>

「で、胡ノ宮がどうかしか？」

<信幸>

「食堂の件なんだけどな……」

廣隆にも信幸の言いたいことは分かる。
なぜあのような突拍子もない事をしでかしたのか。
多分その事を訊いているのだろう。

<廣隆>

「何であんな事をしでかしたのかは分からないが、何か理由があったんじゃないか？」

信幸はキョトンとした顔で廣隆に返す。

<信幸>

「ん？何のことを言ってるんだ相沢？」

廣隆もキョトンとした顔になる。

確実に話が噛み合っていない。

次の瞬間、廣隆は予想外の事を聞く事になる。

<信幸>

「いや……俺が訊いてるのは、何で“巫女服”なんてかさばる物を

制服の下に着ていたのかという事と、どこからあんな弓矢を取り出したのかという事の二つなんだが……」

どうやら信幸にとっては、奇怪な行動は二の次らしい。

<廣隆>

「さあな……だが、この世の中には理屈では説明がつかない事の一つや二つあるって事だ」

<信幸>

「そんな物はないよ、全部理屈で説明つくさ」

<廣隆>

「じゃあ訊くが、何でこの初音島の桜は一年中咲いてるんだ？」

信幸は廣隆の問いに答えられなかった。

確かに、普通に考えれば一年中咲いている桜はおかしい。

信幸たちは今までそれが当たり前だと思っていたが、理屈では説明がつかない、不思議な桜だ。

あえて杉並の言葉を借りて言うなら、“未知の桜”だ。

<信幸>

「なるほど……確かに」

信幸は認めるしかなかった。

要

「許婚宣言ね……そんな事があったのか」

俊樹は昼に食堂で起きたことや、HR中に“許婚宣言”の事など経緯を話した。

要

「だが、そんな話初耳だぞ」

要はホットコーヒーを一口啜る。

俊樹は放課後になると、要を喫茶店に連れだした。

桜公園で話してもよかったのだが、四月だといっても、まだ外は寒い。

そんなこんなで二人は喫茶店に来たのだ。

俊樹

「俺も初耳だ」

要

「ならなぜ俺に訊く？」

要の疑問は当然だろう。

許婚宣言を受けたのは、他でもない俊樹なのだ。

俊樹

「要なら何か知ってるかと思って」

要

「俊樹が知らないのに俺が知るわけないだろ」

確かにその通りだ。

俊樹が知らない事を部外者である要が知るはずもない。

何故かは分からないが、俊樹は不安に覆われた。

SCENE 16

音夢は美春と一緒に昇降口を出ると、さくらが校門の前に佇んでいた。

音夢

「さくらちゃん？」

音夢は不思議そうな顔でさくらを見る。

さくら

「あ、音夢ちゃん」

振り返り、音夢を見る。

音夢の隣には純一がいると思ったからだ。

しかし、その隣にいたのは純一ではなく、見知らぬ女の子だった。

音夢

「この娘は、天枷美春」

さくらの視線が美春に注がれた事に気付き、紹介した。

音夢

「美春、この娘は芳乃さくらちゃん」

今度は隣にいた美春にさくらの事を紹介した。

そんな美春はというと、じーっとさくらの事を見ている。

さくらは美春より身長が低いため年上に見えないのだろう。

音夢はそんなふう思ったが、美春がいきなりさくらに抱き付いた。

美春

「芳乃センパイちっちゃくて可愛いです」

さくら

「美春ちゃん、お肌スベスベ」

今度はさくらが美春の事を抱き付き返した。

音夢

「驚くほど二人とも波長がピッタリね…」

音夢は呟く。

さくらと音夢の家が隣りということもあり三人は一緒に下校した。音夢、美春、さくらの三人は、桜並木を歩きながらさくらの過去を話した。

純一とさくらは従姉だということ、昔一緒に遊んだこと、そして、アメリカに行ったことを。

美春

「へー、芳乃センパイと朝倉センパイは従姉で幼なじみだったんですかー!」

美春は驚く。

無理もない、さくらの事は話したことはないのだから。

音夢

「どうして一人でアメリカから戻ってきたの？」

さくら

「お兄ちゃんとの約束を守るためにね」

桜を見ながら言った。

まるで、過去を懐かしんでいるかのようだ。

美春

「約束って何ですか？」

美春は興味津々だ。

さくら

「アメリカに行く前に、お兄ちゃんと三つの約束をしたんだ」

美春

「どんな内容なんですか？」

さくら

「一つ目は、必ず再会すること。二つ目は困った時は必ず助けること。そして、三つ目は……」

さくらは三つ目の約束を口には出さなかった。

美春

「何ですか？三つ目の約束って」

さくら

「ニヤハハ……それ以上は、恥ずかしくてボクの口からは言えないよ」

さくらはごまかし笑いを上げる。

美春

「え〜、教えてくださいよ」

美春は不満の声を上げたが、

さくら

「ダメダメ、これはお兄ちゃんとボクの秘密なんだから」

どうやらさくらには通用しないようだ。

そんな二人の後ろに、浮かない顔で音夢が歩いていた。

音夢

「秘密か……」

音夢はテーブルの上にノートを広げ、ポツリと呟く。

純一

「何が秘密なんだ？」

いつの間にか帰宅していた純一が顔を覗かせる。

音夢

「兄さん！一体いつ帰って来たんですか？」

音夢は慌てふためく。

考え事をしていて、リビングにいるにも関わらず、純一が帰って来

た事にも気付かなかった。

純一

「今だ」

素っ気なく返し、テーブルに広げてあったノートを取る。純一が手に取ったノートは家計簿だった。

純一

「まめだな……管理しなきゃならないほど、うちには金はないんじゃないか？」

音夢

「お金のあるなしに関わらず、つけるものです」

そう言って、家計簿を純一から奪い取る。

音夢

「うーん……もう少し、節約しないとだめかなあ……お父さんたちにも悪いし」

冷蔵庫から牛乳を取り出す純一の耳に音夢の呟きが聞こえてくる。

純一

「別に気にする必要はないだろう。必要経費なんだし」

音夢

「そうだけど……」

純一はソファーに座り、コップに入れた牛乳を一口飲む。

音夢

「やっぱり無駄遣いは控えないと……自炊をするしかないのかな？」

音夢の呟きに純一の時間が止まる。

純一

「ちょっと待て音夢、食費より医療費に金がかかったら本末転倒だろ」

音夢

「それどういう意味ですか？兄さん」

引き攣ったような笑みを浮かべながら、純一を睨む。

純一

「そのままの意味だ」

音夢

「それでは、兄さんのお小遣いを減らしましょう」

音夢は悪魔の様な笑みを浮かべ、純一をジト目で睨む。

純一

「ダメだ。絶対ダメ。俺が生きていけなくなる」

音夢

「大丈夫。食費の分まで減らしたりしないから」

純一

「そういう問題か？」

音夢

「そういう問題だと思いますけど」

純一

「そういう問題……か？」

純一はガクツと頂垂れた。

音夢

「ハイ」

純一とは打って変わって勝利の笑みを浮かべる。

SCENE 17

夕食を食べ終えた純一は自室に戻ると、ベッドの上にさくらが座っていた。

>純一<

「さくら、どこから不法侵入したんだ？」

>さくら<

「普通に入ってきたよ」

>純一<

「玄関の鍵でも開いてたのか？」

そう言い終わると、家に帰って来てからの自分の行動を思い出してみる。

帰って来て居間に寄り、音夢のつけている家計簿を見て、その後に出前を頼んだ。

出前が来るまでは、自室に籠りっぱなしで、食事中は居間で済ましたし、その時さくらが入ってきたなら、いくらなんでも気付かないはずが無い。

>純一<

だとしたら、いつ入って来たんだろう？

純一が考え込んでいると、さくらは予想外の答えを返してきた。

>さくら<

「桜の木を伝って窓から。ちゃんとノックもしたよ？」

ベッドの上の窓を指差しながら答えたさくらが、
『どうだ、参ったか』とでも言いたげに見えたのは、純一の気のせいだろうか？

> 純一 <

「……それは全世界どこでも不法侵入だと思うぞ」

> さくら <

「お兄ちゃんが良いつて言っただよ」

> 純一 <

「は？……ああ、それは子供の頃の話だろうが」

椅子に腰掛けてため息をつく。

さくらの家の庭から純一の部屋の窓まで桜の木が伸びていて、そこからさくらが遊びに来ていた。

夜中までこっそりと遊んでいた事も、何度かあった。

> さくら <

「あゝあ、これで同じクラスだったら最高だったのにな」

> 純一 <

「……そんな恐ろしい事を平然と言うな」

> さくら <

「うにゃ？恐ろしい？」

> 純一 <

「何でも無い、こつちの話だ。それより、お前は何しに来たんだ？」

『あんな所から』と夜桜が浮かぶ窓を示す。

> さくら <

「そうそう帰ってきた挨拶だよ」

> 純一 <

「学校で散々騒いだだろうが……」

> さくら <

「ぶう！まだ、ちゃんと引越しの挨拶もしてなかったんだもん」

さくらは膝をついて軽くお辞儀をする。

> さくら <

「とりあえず、これからも宜しくお願いしますと言うことで」

後は玄関から入って来て、挨拶出来れば問題はないだろう。

> さくら <

「えへへ、そうそうお兄ちゃん、今でもあそこの鍵直さないでいてくれたんだね。あの窓、六年前から壊れっぱなし」

音夢が無用心だから何度も直そうと言ってきたが、なぜか純一は直す気になれなかった。

> 純一 <

「……面倒だったただけだろ」

純一は呟いたが、さくらの耳に届いたかどうかは分からない。

> さくら <

「ね、今でもアレ出来る？」

さくらがニパニパと手を閉じたり開いたりした。

> 純一 <

「これか？」

純一は左手を軽く握り締め、適当な和菓子　饅頭を思い浮かべる。
すると、何も無かった左手に重さが生まれる。

他人の夢を見せられることと合わせて純一が持つ、無から和菓子を
生み出す不思議な力。

あんまりにも馬鹿らしく、音夢にすらこの力を秘密にしているのだ
が、さくらだけはこの力の事を知っていた。

> 純一 <

「ほら、アンコ多めだ」

> さくら <

「わっ、とと」

空中に放った饅頭を、慌ててさくらがキャッチする。

コンコン

部屋がノックされ、中に入ってきたのは勿論音夢だ。

> 音夢 <

「兄さん……えっ、さくらちゃん？」

当然部屋の中には純一しかいないと思っていた音夢が、ポカンとさくらと純一を交互に見比べる。

>音夢<

「さくらちゃん、何やってるの?」

未だに状況が分かっていない音夢。

>さくら<

「引越しの挨拶だよ。今日はもう遅いし帰ることにするよ」

さくらはベッドから立ち上がり窓を開けた。

しかし、さくらは部屋から出る様子は無く、振り返り純一に顔を近づける。

すると次の瞬間、純一とさくらの唇が重なり合った。

>さくら<

「じゃあね、お兄ちゃん、音夢ちゃん、おやすみなさい」

そう言い残し、窓から出て行った。

SCENE 18

瞼に染み込む朝日に刺激され、純一は目覚めた。

>音夢<

「おはようございます、お兄ちゃん」

目を開けると、なぜか音夢が隣で添い寝をしていた。

>純一<

「何してるんだ？」

>音夢<

「何してるって……いつも一緒に寝てるけど？」

>純一<

「いつも一緒に……寝てる？」

>音夢<

「ねえ、お兄ちゃん、いつもの朝の挨拶……して」

そう言つて、音夢が瞼を閉じる。

>純一<

あれ、前にも似たような事があったような……

何かを思い出した純一は、瞼を閉じている音夢をチラッと見る。

>純一<

そうか、これは夢だ……ならば

音夢は妹だとわかってはいるが、欲望には勝てなかった。

>純一<

「いただきます」

>音夢<

「はい、ごちそうさま!」

ゴスッ

固い口付けと共に、またしても夢は終わった。

>純一<

「痛てえ……!」

純一が目を覚ますと、顔の上には、毎度お馴染みの国語辞典が乗っかっていた。

それを退かすと、不機嫌顔の音夢の姿があった。

>音夢<

「早く起きて下さい、兄さん」

>純一<

「なんでそんな不機嫌そうな顔をしてるんだよ?」

>音夢<

「どうせ、昨日の夜の続きの夢でも見てたんでしょ」

音夢は膨れっ面で言った。

>純一<

「違う、そんなじゃない」

否定したが音夢の追及の手は緩まない。

>音夢<

「では、どんな夢を見ていたんですか？」

>純一<

「……」

純一は口ごもった。

例え血が繋がってないとは言え、音夢は純一の妹だ。
夢の中でキスをしたとは、口が裂けても言えない。

>音夢<

「言えないという事は、やっぱり変な夢だったんですね」

>純一<

「違う。いや……何とは言えないが、お前が想像しているのとは違うぞ。いいかそもそも夢というのは現実起きた事を試写選択し、記憶に留めるための情報管理システム……」

>音夢<

「それはへ理屈と言うモノです」

言い終えると、部屋から出て行った。

> 杉並 <

「おはよう、朝倉」

純一が教室に入って初めに声をかけてきたのは杉並だった。

> 純一 <

「なんだ杉並か……」

> 杉並 <

「どうしたんだ？朝倉、浮かない顔をして」

> 純一 <

「なんでもない……」

杉並は訝しげに純一を見た。

> 廣隆 <

「姫君と喧嘩でもしたか？」

廣隆が二人の話の間に入って来た。

純一はチラッと音夢を見る。どうやら、音夢は不機嫌な様子だ。

> 眞子 <

「朝倉、あんた音夢に何したの！」

音夢の事を心配した眞子が、廣隆・杉並の連合軍に加勢した。

> 朝倉<

「はぁ……お前ら……揃いも揃って」

純一がぼやくと、新たな標的見つけた杉並が茶化す。

> 杉並<

「水越、人の家庭事情に口出しするのはヤボと言つものだぞ」

純一は『お前が言つな』と、突っ込もうとしたがかつたるかつたので、胸に留めておく事にした。

> 杉並<

「まあ……朝倉個人に興味があるなら、話しは別だがな」

不敵な笑みを浮かべた杉並に、眞子は右ストレートを放ったが杉並は難なくそれを避ける。

> 杉並<

「フッ……お前とは何年付き合つてると思つてるんだ？口より先に手が出るお前の行動など、手に取るように分かる」

当然、この程度で引く眞子ではない。

一発、二発、三発と無数の怒りの鉄拳を放つが、杉並はそれを全部避けた。

純一は呆れ顔で二人を眺め、廣隆は巻き込まれないように避難した。かくして廣隆・杉並・眞子の連合軍VS純一の戦いは眞子と杉並の仲間割れという不本意な まあ、ある程度は予測していた 結果で幕を閉じた。

SCENE 19

昼休み

純一は学食に行こうと立ち上がり、財布を探したが、どこにも見当たらない。

右ポケットを探し、左ポケットを探す。

ポケットに無い事を確認すると、鞆の中を探した。

>純一<

「財布忘れた……」

純一はガツクリと肩を落とした。

純一の横を音夢が通り過ぎようとする。

>純一<

「音夢、昼メシ一緒に食おう……というか奢ってくれ」

音夢はチラッと振り返り、素っ気なく答えた。

>音夢<

「生憎、私も持ち合わせがありませんので」

不機嫌な様子で教室を出て行く。

>純一<

「あの妙によそよそしい態度、馬鹿丁寧な敬語、『裏音夢』出現だな……」

純一は呟く。

『裏音夢』とは純一がひそかに『裏モード』と呼んでいる時の表情だ。

外面のよい音夢は、学園内では優等生ということで通っているが、純一にこの『裏モード』で対する時は、いつも怒っている時なのである。

頭をポリポリと掻き、かつたるそつに音夢の後を追いつけた。

>純一<

「ちよつと待て、音夢」

純一が声をかけるが、足を止める様子も無い。

>純一<

「何を怒っているんだよ？」

>音夢<

「別に、怒ってなんていません」

素っ気なく返すが、眉間にシワを寄せているのが見える。

>純一<

「今朝の夢の事を怒ってるのか？それだったら……」

>音夢<

「違います！だって兄さん、昨日さくらちゃんと……」

どうやら音夢が怒っているのは、今朝の夢の事では無く、昨日のさくらとキスをした事を怒っているらしい。

> 純一<

「いや……あれは深い意味は無いんじゃないのか？ さくらはアメリカ暮しが長かったし……それに向こうでは挨拶みたいなモンだろ」

> さくら<

「そんな事はないよ」

必死で弁解した純一だったが、音夢の怒りの元凶であるさくらがそれを否定する。

そればかりか、純一を窮地に追い込む。

> さくら<

「それに唇は初めてだし」

純一と音夢が絶句する。

> 純一<

「それって……どうゆっ……」

冗談だと言っ事を願いながら問う純一。
しかし、それをも打ち砕く事に。

> さくら<

「責任取ってもらって事」

> 純一<

「陰謀だ！あの時は回避する術が無かった……」

> さくら<

「そんな事よりお兄ちゃん、一緒にお昼食べよう お兄ちゃんの大

好物のウニマヨおにぎりを作ってきたんだよ」

『ほら』と両手を差し出すさくらの手には、弁当箱が二つ握られていた。

> 純一<

「この一大事をウニマヨで片付けるな」

> 音夢<

「よかったですね兄さん。お昼ご飯にありつけて」

言い捨てると音夢は学食へと向かっていった。

純一は追い掛けようとしたが、さくらが腕にしがみついていて追い掛ける事が出来ず、見送る事しか出来なかった。

一方、その頃体育館裏で食事をしている生徒の姿があった。
俊樹・要・信幸の三人だ。

> 信幸<

「たまには静かに昼飯というのもいいもんだな……」

信幸は体育館裏の地面に腰掛け、パンを一口噛った。

> 俊樹<

「そつだな……」

俊樹は空を仰ぎながらコーヒーを一口啜る。

その姿はまるで縁側に腰掛けて、お茶を啜る老人のようだ。

>要<

「俊樹、お前その姿……ジジ臭いぞ」

要は突っ込んだが、どうやら聞こえてないらしい。

まあ、それは仕方のない事だった。

いつも昼休みになると、この二人の回りには女子生徒が集まってくる。俊樹は主に下級生に慕われており、頼れるお兄さんといった感じだろう。

信幸はと言うと、年上に可愛がられ、年上の人から見れば信幸は可愛い弟みたいに見えるのだろう。

そのせいもあり、大概昼休みは静かに食べる事が出来ないでいる。

二人は久しぶりの長閑な午後のどかの一時を満喫しているのだ。

>信幸<

「圭一も誘えばよかったんじゃないか？」

>要<

「誘おうとしたんだが……杉並と一緒にだったんで止めた」

二人は納得したように頷いた。

圭一・杉並の問題児二人と関わろうとするヤツはいないだろう。
若干二名を除いては。

>信幸<

「いい天気だな……このまま昼寝でもしたいくらいだ……」

信幸が呟いた

その時

長閑な午後の一時は脆くも崩れ去った。

体育館裏に近づく騒がしい声。

その正体は俊樹・信幸を慕う女子生徒の声だ。

二人はガツクリと頂垂れ、新たに静かな場所を探し出すべくその場を後にした。

一方、一人体育館裏に残された要は、あの二人の境遇を大変そうだなと他人事のように思い、横になり昼寝を始めたのだった。

つづく

SCENE 20

時を同じくして、廣隆と工藤は校門前を歩いていた。

> 工藤<

「たまには外で昼飯を食べるってのも、なかなかオツなものだな」

> 廣隆<

「だろ？少し前にウマイ定食屋を見つけて、いつか紹介したいと思つてたんだ」

時々こうして学食ではなく外で昼飯を食べる事がある。

学校では特に外出を禁じていないため何人かはそういう昼休みを過ごしている。

廣隆と工藤は、並木道へ足を向けると、人形を持った女子生徒が歩いてくるのが見えた。

> 廣隆<

「よっ、月城」

アリスが二人の前までやってきて、ペコリと頭を下げる。

> 廣隆<

「どうしたんだ？遅刻か？」

> 工藤<

「おいおい、相沢じゃないんだから……」

間髪入れず工藤が突っ込む。

> 廣隆<

「オレだってこんなに遅刻はしないっての、それに、こんな時間に学校に来るぐらいだったらサボってるって」

廣隆はなぜか自信満々に言った。

> 工藤<

「自信満々に言っな」

工藤は冷めた突っ込みを入れる。

> アリス<

「……遅刻です」

意外な答えが帰って来る。

> 廣隆<

「……ホントに遅刻だったのか」

> アリス<

「……用事があつて」

> 廣隆<

「用事？」

アリスは頷き、鞆の中からビニール袋を取り出しそれを廣隆達に見せた。

> 廣隆<

「肥料？……ああ、あの草の」

正確に言うなら『花』なのだが。

>工藤<

「何だ？あの草って？」

アリスが袋を収め、廣隆に視線を向けた。

>廣隆<

「いや……別になんでもない」

廣隆がそつこたえると、アリスは安堵の表情を見せる。

>工藤<

「この子の大事な秘密ってことか」

>廣隆<

「まあ、そんな所だ」

>工藤<

「それなら深く聞くのは止めよう」

>アリス<

「……先輩、サヨナラ」

アリスはそう言って、もう一度頭を下げると、スタスタと学校に入
っていった。

>工藤<

「遅刻をしても、守りたい何かがあるってことか……」

> 廣隆<

「ああ……」

> 工藤<

「相沢も、そう言うカッコイイ理由で遅刻をするなら、いいんだろ
うけどな」

> 廣隆<

「大きなお世話だ」

そんな時、一人の女の子が目の前をフラフラと歩いていた。

> 萌<

「すや〜〜〜」

よたよたと千鳥足で歩きながら、校門の壁にぶつかり、そのままズルズルと地面にずり落ちる。

> 萌<

「ムニャムニャ……シャッキリボンといいお味……」

萌はそのまま気持ちよさそうに眠りに落ちた。

> 廣隆<

「……こういう遅刻の仕方より、ナンボかマシだと思っただが」

> 工藤<

「それは認めてやろう」

学校が終わり、桜並木を憂鬱そうに歩いている姿があった。
純一だ。

> 純一 <

帰るのが億劫だ……
おっくう

その理由は他でもない音夢だ。
まだ音夢の怒りは治まっていない。『歩いても歩いても家にたどり着けなければいい』と何度思った事か。

しかし、その都度『そんな非現実的な事あるわけない』と苦笑した。

純一は歩きながら考え事をしていた。

眞子や相沢達には言いたい事は言えるのだが、音夢にだけは言えないのはなぜだろうと。

しかし、何度考えても思い浮かんだのは『音夢に特別な感情があるからなのでは』と言う事だ。

純一は首を振り、それを否定した。

血は繋がっていないとはいえ音夢は義妹なのだ。

そんな事あるはずがない。

純一が何かに気付き、顔を上げると家の前に着いていた。

> 純一 <

「着いちまった……」

とぼやいた。

学校に行く時は遠く感じるのだが、今はなぜか物凄く近く感じられる。

純一は深呼吸をすると、覚悟を決めて家の中に入ってしまった。

> 純一 <

「ただいま……」

玄関に音夢の靴があり、既に帰ってきている事がわかる。

しかし、返事が無い。

どうやら部屋に籠っているらしい。

制服から着替え終えた純一が次にした事は、晩飯の準備だ。と言っても作るのでは無く、店屋物の注文だ。

注文してから十数分が過ぎた頃だろうか、店屋物が届き、音夢に声をかけた。

> 純一 <

「音夢ー！、晩飯だぞ」

> 音夢 <

「……」

しかし、音夢は反応しない。

未だ怒りが鎮まらないのだろう。

籠城の構えをみせた。

しかし、

ぐうっ……

腹の虫が鳴る。

人はどんな時でも腹は減るもの。

兵糧がなければ籠城は成り立たない。

音夢は渋々部屋を出て、階段を降り、居間に入た。

> 純一<

「今日の晩飯は豪勢にウナギだ。俺の奢りだ」

> 音夢<

「……」

音夢はそれを軽くスルーして、キッチンの戸棚に仕舞ってあった力
ツプ麺を取り出した。

> 純一<

「なんだよそれ……感じ悪い」

> 音夢<

「ごめんなさい、兄さん。今日はウナギの気分じゃないの……」

> 純一<

「じゃあ、今日はカップ麺の気分なのか？」

純一はムツとして返す。
だが音夢は反応しない。

> 純一<

「はあ……かつたりい……」

純一は呟いた。

> 音夢<

「かつたるくて、結構です」

さらに音夢も呟いた。

だが少しして言い過ぎたと後悔したが、音夢にも意地がある。
ここまで来たからには、後に引けなかった。

つづく

SCENE 21

純一は何もせず、ただポケ〜とテレビを見ていた。

情報番組らしいが、内容までは頭の中に入ってこない。

昨日の出来事と今日の音夢の態度が頭から離れないからだ。

なぜ音夢が怒っているのか分かってはいるが、どうすればいいのかは全く分からなかった。

純一はため息をつき、立ち上がる。

トゥルルルル

自室に籠り、本を読んでいると、ポケットに仕舞ってあった携帯電話が鳴った。

ポケットから携帯電話を取り出し、ディスプレイに表示された名前を確認すると『朝倉純一』

ディスプレイにはそう表示されていた。

> 俊樹 <

「……………もしもし、朝倉か？どうしたんだこんな時間に」

時刻は8時を過ぎていた。

> 純一 <

『ああ……………ちよっとな……………』

妙に歯切れが悪い。

どうやら言いにくい事だろう。

> 俊樹<

「喧嘩でもしたか？」

> 純一<

『音夢と喧嘩なんて……』

予想通りの答えが帰ってきた。

> 俊樹<

「別に音夢さんと喧嘩した、とは一言も言っていないんだが」

> 純一<

『うつ……』

純一は口ごもった。

これも俊樹の計算のうちだ。

純一が歯切れ悪い時は、大概音夢と喧嘩している時だと言う事を、俊樹は知っていた。

> 俊樹<

「それで、何があった？」

> 純一<

『もし……もしさ、幼なじみとキスした所を妹に見られて、それでその妹が怒っていたら相楽はどうする？』

純一は敢えてさくらと音夢の名前を出さなかった。

名前を出すのが照れ臭かったからだ。

> 俊樹<

「難しいな……朝倉、お前はどうか？もし立場が逆なら、お前はど
うする？」

> 純一<

『えっ……』

純一は少し考えてみた。もし、音夢の部屋を開けて他の男とキスを
していたら……。

> 純一<

『……イヤだな』

> 俊樹<

「なら、その妹も同じ気持ちなんじゃないか？だとしたら、今自分
が何をすればいいのかハッキリ見えてくるはずだ」

> 純一<

『そうだな……』

今純一がすべき事は素直に謝る事だ。

> 純一<

『ありがとな相楽』

そう言うと純一は電話を切った。

> 俊樹<

「頑張れよ朝倉」

電話を終えた俊樹が呟いた。

> 純一<

「音夢」

電話を終えた純一が向かった先は洗面所だ。

音夢は今風呂に入っているため、洗面所に居れば話ができるからだ。

> 音夢<

「えっ……兄さん」

> 純一<

「面と向かって話すと余計にこじれるからさ……」

> 音夢<

「うん……」

> 純一<

「ごめんな……さっきは言い過ぎた……」

音夢には純一の言う『さっき』とは居間での事だと分かっていた。しかし、純一が何を言うのかは全く分からなかった、そのため純一が言い終えるまで、一切口を挟む気は無かった。

> 純一<

「音夢が怒っているのはさくらとキスをしたからじゃないんだよな」

これは相楽と電話をした時に気付いた事だ。

> 純一<

「俺も音夢の部屋を開けたら知らない男とキスをしてた……何て言うのはイヤだからな」

> 音夢<

「そんな事するわけないじゃ無い!!」

音夢は顔を真っ赤にしてそれを否定した。

> 純一<

「分かってるよ……何て言うか、その……この家のルールと言うか……つまりあれだ『親しき仲にも礼儀あり』ってやつだ。それだけ」

言い終えた純一は洗面所から出ていった。

> 音夢<

「兄さん……」

さっきまで頭の中に靄がかかっていたが、純一の話の聞いたらその靄がスッと消え去っていた。

う
う
く

SCENE 22

俊樹は疲れた表情を浮かべながら、桜並木を歩く。

先程までは信幸と一緒に登校していたのだが、ファンの女の子に囲まれ、散り散りに逃げた。

いつもならこの時間は朝連をやっているのだが、今日は顧問の先生が朝連に来れないという事で休みになったのだ。

信幸の所属するサッカー部も同様の理由だ。

しかし、それは部員のみ知っている情報でファンの女の子がどこから仕入れたのかは不明だ。

<俊樹>

仲直りできたかな朝倉は？……まあ大丈夫だろ朝倉なら

と、考えながら歩いていると後ろから肩をポンツと軽く叩かれ振り向くと純一が立っていた。

<純一>

「よっ相楽」

いつもと変わらない様子で声をかけてきた。

<榊>

「なんだ朝倉か」

<純一>

「なんだとは冷たい言い草だな榊」

いつも通りに返した所を見ると、どうやら仲直りはできたのだろう。

< 柊 >

「朝倉がこんなに速く登校するなんて……今日は雪でも降るのか…
…困ったな」

わざとガツカリする仕草を見せる。

< 純一 >

「どうゆう意味だ」

等とふざけあっていると、純一が真剣な表情を浮かべた。

< 純一 >

「昨日はありがとくな……」

辛うじて聞き取れるくらいの小声で言った。

< 俊樹 >

「やっぱり今日は雪が降るのか？」

俊樹は天を仰ぐが、空は雲一つなく晴れ渡る青空だ。

< 純一 >

「だから、どうゆう意味だ……ん？」

同じように学校へ向かう学生達の中に、純一は見知った人物の後ろ姿を見つけた。

< 純一 >

「あれ環じゃないか？」

俊樹は前を見据えると、後ろ姿からでもわかる独特の雰囲気醸し出した環の姿が見える。

<俊樹>

「おーい、環」

声をかけると長い髪をなびかせながら環が振り返る。

<環>

「あら、相楽様、朝倉様。おはようございます」

<純一・俊樹>

「おはよう」

二人は小走りで追いつくと、彼女の横に並びかけた。

環が転校してきてから数日が経つ。

当初、彼女の『許婚宣言』で沸き立っていたクラスメイト達も、俊樹が知らぬ存ぜぬを押し通しているうちに、次第に興味を失ったかのように沈静化していた。

二人がそれらしい態度で接していない……ということも一因なのだろう。

<俊樹>

「今日はゆっくりなんだな」

毎朝、早起きして巫女の仕事をこなすためか、環は早くから学校に來ていることが多い。

俊樹は朝連が終わると、環がちょうど登校している姿を何度か目撃したことがあった。

そのためこんな時間に登校してくるのは珍しい事だ。

<環>

「実は……ちょっと寝坊をしてしまいました」

<純一>

「へえ、環でもそんな事があるんだ。じゃあ巫女のお務めとかも？」

<環>

「いえ、それはさすがに休めませんから……」

環が言い終わった時、グーとお腹が鳴る音がした。

純一と俊樹が顔を向けると、彼女は恥ずかしそうに俯いている。

<俊樹>

「朝飯を食う時間は無かった訳か」

<環>

「……はい」

赤い顔をしたまま頷いた。

<環>

「お弁当を作ることできなくて」

<純一>

「それは学食にでも行けばいいけど……」

さすがに朝食だけはどうしようもない。

<純一>

仕方ない……

純一はそつと気付かれないように右手を背中に回し、頭の中で適当な和菓子 饅頭を思い浮かべる。
すると、何も無かったはずの右手の中には、いつの間にか想像していた通りの饅頭があった。

<純一>

「これ、よかつたら」

<環>

「え？」

純一が差し出した饅頭を、環は不思議そうな顔で見つめる。

<環>

「これ、どこから？」

<純一>

「毒は入ってないから、遠慮するな」

俊樹は純一の能力を知らなかったが、手品だろうというくらいにか捉らえておらず、あまり気にも止めなかった。

<環>

「はい、じゃあ……いただきます」

純一が無理矢理押し付けるようにして渡すと、環は戸惑いながらも饅頭を口にした。

<環>

「あ、おいしい」

さつきまでの赤面した顔が笑顔に変わる。

<純一>

「そうだろう」

上品な雰囲気もいいが、今のうちに打ち解けた笑い方もいい。

<環>

「ごちそうさま」

饅頭を平らげた環は丁寧に合掌する。

<俊樹>

「環はテレビとか見るのか？」

話題に困った俊樹が、つい口から出たのがこれだ。

<環>

「いえ……あまりテレビは見ません」

環は申し訳なさそうに言った。

<俊樹>

「じゃあ、どうゆつのが好きなんだ？」

<環>

「動物が出てるのが好きです……」

環は以前見た『動物○想天外』の事を話した。その内容は、ペンギンの特集だった。動物の話をしている環の顔は、生き生きとして楽しそうに見える。

<俊樹>

「動物の本を読むのも好きとか？」

<環>

「たまに読みますけど……一番好きなのは源氏物語です」

<純一>

「えっ、あの七人のアイドル！」

<環>

「何ですか？七人のアイドルって」

ボケた純一だったが、環には理解不能の様子。

<純一>

そう言えばさっき、テレビはあまり見ないって言ってたな……

<環>

「あの……朝倉様？」

<純一>

「あっ……いや、何でもない」

環は小鳥のように小首を傾げた。

< 俊樹 >

「まあ、あまり気にするな。いつもの事だから」

俊樹は苦笑しながら言った。

俊樹はこの登校中に環のかわいらしさを垣間見たような気がした。

つづく

SCENE 23

昼休みになり、要は純一と二人で学食を訪れた。
要には一つ気になったことがあり、純一を誘ったのだ。

<要>

「なあ、朝倉一つ気になってることがあるんだ」

<純一>

「なんだ？」

純一はカツ丼を一口食べて応じる。

<要>

「二組に転校してきたツイントールの娘と、付き合ってるって話を聞いたんだが……本当なのか？」

<純一>

「ゴホッ……」

要がいきなり変な事を言ったので、むせてしまった。

<要>

「大丈夫か？」

純一は勢いよくトレイの上に乗っていたコップを掴み、中に入っていた水を一気に飲み干した。

<純一>

「いきなり変な事を言うなよな……」

<要>

「それでどうなんだ？」

<純一>

「付き合って無い。アイツはただの幼なじみだ」

<要>

「そうか……」

要はそれ以上追及してこなかった。

一瞬純一は、どこからそんな話を聞いたのか疑問に思ったが、例の問題児二人組の顔が思い浮かび、何も言わなかった。

<さくら>

「テストテスト……テスト」

どことなく気の抜けた校内放送が鳴り響き、周りの生徒がざわめいた。

今まで昼休みに校内放送など流れたことがなかったからだ。

<さくら>

「お兄ちゃん、ボクだよお昼一緒に食べよ 屋上で待ってるよ」

それだけ言うと、校内放送は切れてしまった。

<純一>

「へー、そんな大胆なヤツがいるんだな」

純一は今の放送がさくらだという事がまるで気付いてない。

<要>

「スゴイ大胆だな……」

要もカレーを一口食べて言った。

こちらにもさくらだと気付いてない様子。

<音夢>

「兄さん、ここ空いてますか？」

音夢がひよっこり顔を覗かせた。

<音夢>

「榊君、相席してよろしいですか？」

<要>

「ああ……俺は構わないが……」

音夢は純一の左隣りに空いていた席に腰掛けた。

<要>

「じゃあ、俺は席移るわ」

そう言って要はトレーを持って立ち上がろうとした。

<音夢>

「あれ、席移るんですか？」

<要>

「ああ……俺は二人の邪魔をするほど野暮じゃないんでね」

<純一>

「そんなんじゃないって……なあ、音夢？」

<音夢>

「ご飯はこつやって大勢で食べると美味しいですよ」

<純一>

「三人で大勢って言うのか？」

要が腰を降ろすと、純一が呟いた。

<音夢>

「もう、いいでしょそう言う細かいことは！」

頬を膨らませ音夢が反論する。

<純一>

「それよりもお前、そんなんで足りるのか？」

純一は音夢の正面にある三個のサンドイッチを見て言った。
年頃だとはいえ、いくらなんでもこの量は少な過ぎる。

<純一>

「金が無いなら貸してやろうか？」

<音夢>

「大丈夫、財布は持ってきてるから。ただそんなに食べたくないだけから」

<純一>

「だから胸も大きくならないんだな……」

茶化すと純一はカツ丼を一口食べようとするが、隣にいる音夢の殺気で手が止まる。

<音夢>

「兄さ〜ん……どうやら泣き叫びたいようね……」

音夢はいつでも怒りの一撃が振り下ろせるように、自分の足を純一の足の上にセットした。

<純一>

「スマン……全面的に俺が悪かった……」

純一はあっさりと白旗を上げた。

<さくら>

「お兄ちゃん！何で屋上に来てくれないんだようボク待ってるからね」

再び校内放送が流れる。

<要>

「またあの放送か……大胆だな」

<音夢>

「この声って……まさか……」

音夢の脳裏にさくらの顔が浮かぶ。

まさかいくらなんでもここまでするはずは無いだろっ。

音夢は自分にそう言い聞かせる。

三人は並んで学食を後にした。

三人の正面から二人の先生の姿が見え、純一を見ると物凄い勢いで近付いてきた。

「朝倉 !!」

<要>

「何か怒っているような感じだな……朝倉お前、何仕出かしたんだ？」

要の隣には純一の他に音夢もいるのにも関わらず純一に訊いた。
今までの行いを考えれば当然だろう。

<音夢>

「兄さん……また、よからぬ事を……」

音夢はジト目で睨む。

<純一>

「ちょっと待て、俺は何もしてない!」

見に覚えのないことで犯人にされたくはないため純一は必死で弁解する。

<要>

「朝倉……俺にはわかってるぞ……お前がやったんじゃないだろ」

要は助け船をだした。

<純一>

「そう言ってくれるのは……要、お前だけだ」

純一は少し感動した。

やっぱり要は俺の味方だ……と。

<要>

「ああ……お前がやったんじゃない。お前の中にある衝動に駆り立てられただけなんだ……」

しかし、純一の思いは虚しく打ち崩される。

要は純一をガツチリと掴み、逃げられないようにした。

隣にいた音夢も同じ行動を取る。

今の今まですっかり忘れていた事があった。

それは音夢が『風紀委員』だと言う事だ。

要一人にしがみつかれたら、何とか振り切る事ができるが、音夢まで加勢したとなればそう簡単に逃げ出せ無くなる。

<純一>

「ちよつと待て音夢、俺がそんな事をすると思つのか？」

<音夢>

「はい！」

即答されてしまった。

<純一>

「俺がそこまで信用できないのか？」

<音夢>

「全然信用できません」

それでも諦めず抵抗したが、音夢も要も逃がす様子はなかった。

「さあ、職員室に行こう。朝倉」

要と音夢は純一を二人の先生に身元を引き渡した。

その後、職員室に連行された純一は、さくらと共に説教を受ける羽目に、純一は自分がなぜ説教を受けているのかイマイチ理解出来なかったが先生の話しによると、さくらが放送室を乗っ取った事を、連帯責任とされ純一が職員室に呼ばれたのだ。つまり純一は巻き込まれただけだった。

つづく

SCENE 24

廣隆は学食に向かうため階段を降りたが、後ろから聞きたくない声が廣隆の耳に届く。

<曆>

「おや、相沢じゃないか。いい所で会ったね」

廣隆の後にはキラリと眼鏡を光らせ、悪魔のような笑みを浮かべた曆が立っていた。

<廣隆>

「これはこれは曆先生じゃないですか。ご機嫌麗しゅう……」

<曆>

「思ってもない事を口にしないでいいよ。言うだけ無駄だったの」

曆は少々呆れ顔だ。

<廣隆>

「つで、何の用っすか？」

呆れ顔だった曆だが、何かを思いだしたのか再び悪魔のような笑みを浮かばせる。

<曆>

「この前のテストの事で少し訊きたい事があったね」

<廣隆>

「『この前のテスト』と言うと、実力テストの事ですか？」

それは以前『テストをやるぞ』と言う暦の発言から始まったテストの事で、暦はこれを『実力テスト』と名付けた。

<暦>

「そう。どうやったらあんな点数が取れるのか教えて貰いたいと思っていますな」

暦はニヤリと笑う。

この表情はヤバイ。

瞬時に脳裏をよぎった。

廣隆は去年もこの人が担任だった、そのためこの表情をする時は何かヤバイ時だと言う事を知っていた。

『逮捕状はあるのか』と言いたい所だが、仮に言ったとしても『私が法律だ』と返されるのだろう。

この人はそういう人だ。

廣隆は有無を言わず、首根っこを掴まれ実験室に連れて来られた。ここは暦専用の休憩室となっている。

<暦>

「あのさ、7点ってなんだよ7点って！」

<廣隆>

「いや、その……縁起がいいかな……と思って……」

<暦>

「じゃあ何か、狙って取ったて言いたいのかい？」

<廣隆>

「そういう事になりますかね……」

まるで取調べを行われている犯人のようだ。

廣隆は追及の手を何とか逃れるため奮闘する。

だが鬼刑事・暦の追及を逃れることは不可能に近かった。

< 暦 >

「ふざけんじゃ無いっての！そんなに言うなら77点取れっての！
」

< 廣隆 >

「いや、ほら……潔さってあるじゃないですか……」

< 暦 >

「ふーん、潔さね……じゃあ今度は狙って100点でも取ってもらいたいね。そのほうが、よっぽど縁起がいいぞ」

< 廣隆 >

「アハハハ……」

ガラガラ

廣隆がごまかし笑いを上げていると、実験室の扉が開いた。

中に入って来たのは、人形……？ いや、人形を抱えたアリスだ。

< 暦 >

「月城？どうしたんだい、何か用か？」

< アリス >

「……呼ばれたので」

< 曆 >

「ああ……そうだった、私が呼んだんだ」

前に一度アリスに『いつでもいいから実験室に來い』と言っていた事を思い出した。

< 曆 >

「月城、学校は遊び場所じゃ無いんだ。だから、学校に人形を持ってくるのは……」

< アリス >

「……大事なんです。ピロスは私の大事な宝物だから……」

< 曆 >

「月城……あのな」

< 廣隆 >

「まあまあ曆先生、月城も次から気をつけるって言ってるし……」

見兼ねた廣隆が助け船を出した。

< 曆 >

「はあ？そんな事、一言も言っ……」

< 廣隆 >

「ほら月城も気をつけるって言っとけ、この人は怖い人だ。いつ実験材料にされるかわからないぞ」

< アリス >

「……………気を……………つけます」

< 曆 >

「相沢……………あんた……………」

曆は『ハア……………』とため息をついて、アリスに向き直る。

< 曆 >

「わかった。月城、次から気をつけるんだよ」

< アリス >

「はい……………」

アリスはペコツと頭を下げると、実験室を出ていった。

< 廣隆 >

「ふう……………」

と息をついてつかの間、曆が廣隆を問い質す。

< 曆 >

「相沢、あんた一体どういっつもりだ？」

< 廣隆 >

「えっ……………だ、ダメですよ……………あの人形は」

< 曆 >

「あの人形が大切な物くらいわかってるよ」

< 廣隆 >

「じゃあ何もわざわざ呼び出さなくても……」

< 曆 >

「教師が私一人だったら何も言わないさ。だけどああゆづのを毛嫌いする先生もいるんだよ」

曆が言っている事も理解できる。

それは、生徒側からしても同じだからだ。

廣隆は慣れてしまったから別に何ともないが、初めてアリスを見た人は彼女を変な女の子と思うだろう。

< 曆 >

「あの娘は何かが足りないんだ。最近是天枷が付き纏ってるらしいけど……相沢、あんたあの娘の事何か知ってるのか？」

< 廣隆 >

「いえ……何も」

< 曆 >

「だったら……なぜ、月城を庇うんだ？私が知ってるかぎりでは、アンタとあの娘との接点は無いに等しいんだがね」

廣隆を知っている他の人も、曆と同じ事を言うだろう。

< 廣隆 >

「色々あるんですよ」

< 曆 >

「そうかい、そうかい。わかったよ、月城に何かあったら相沢が面倒見るって事だな」

<廣隆>

「えっ、俺が！」

<曆>

「そう言う事だろ今は」

曆はニヤツと笑みを浮かばせる。

こうなる事がわかっていたらしい。

廣隆は嵌められたという気持ちになった。

<廣隆>

「朝倉じゃないが、かったりいなそう言うの」

<曆>

「ばやくな、私も何とかしてやりたいと思ってたんだ。見るからにいつも一人で……だけど立场上そうしてはくれないし」

<廣隆>

「それで俺には何も出来ませんよ。さっきも言ったように、相手にされてないと言うか……」

廣隆は珍しく考え込む。

<曆>

「そう難しく考えることは無いよ。アンタができる事を出来る時にすればいいんだ」

曆は言い終えると急に立ち上がる。

< 曆 >

「ああそうだ、相沢アンタ飯はまだか？まだだったら奢ってやるよ」

< 廣隆 >

「えっ？マジっすか」

< 曆 >

「学食でいいならな。ホントは特定の人と、こういう事をしてはいけないんだが……まあ、たまにはいいだろ。テストの点数は7点しか取れないが、他にいい点を取ってるからな」

扉をガラガラと開けて出ていった。

< 廣隆 >

他にいい点を取ってるって何だ？まっ、いいか

廣隆も曆の後を追うように実験室を出ていった。

SCENE 25

放課後

俊樹は舞い落ちてくる花びらを片手で払いのけながら、向かった先は、自宅ではなく神社だ。

今の俊樹にとって、当たり前となつてしまった桜より、転校生の『許婚宣言』の方が重大な問題である。

環は時間をかけて、二人の間にある『深い絆』とやらの意味を探したいと言っていたが、曖昧なままでは気持ちが悪い。

と言うわけで、俊樹は久しぶりに神社へとやってきたのだが、境内へと続く長い石段に閉口してしまった。

なぜか神社というのは、小高い丘か山の上にある場合が多い。

<俊樹>

何でこんなに長いんだ……

等と考えながら、黙々と石段を上っている

<環>

「あら、相楽様ではないですか」

不意にその当人から声をかけられ、俊樹は驚いて顔を上げた。

見ると、いつの間にか境内が見えてきており、その中央では箒を持った環が掃除をしているところであった。

もちろん彼女は巫女姿だ。

<環>

「ようこそお越しくださいました。お参りですか？」

< 俊樹 >

「ん、まあ……そんなもんだ」

目的は環と話をすることだったのだが、せつかくあの長い石段を上ってまで神社にやってきたのだから、お参りくらいはしてもいいだろう。

< 環 >

「あつ、参道を歩かれる時は、端の方を歩いた方がいいですよ」

< 俊樹 >

「そうなのか？」

< 環 >

「ええ、参道の真ん中は神々が通られますので、人はそれを避けて端を歩くのが古くからの習わしなのです」

< 俊樹 >

「知らなかったな」

さすがは巫女と、妙な感心をしながら拝殿への階段を上がって賽銭箱の前に立つ。

五円玉を投げ入れ、鈴を鳴らして頭を二回下げた。

そして、二回拍手を打った後、目を閉じて心の中で住所と名前を告げて願事を伝える。

『二拝二拍手一拝』というやつだ。

詳しいことは知らないが、この程度の知識はある。

誰かから聞いたような、何かの本で読んだのかは忘れたが。

お参りを済ませた後、俊樹は改めて境内の中を見渡した。

子供の頃によく遊びにきたものだ、廣隆・信幸・要・圭一の四人と

共に来た事もあった。

縁日があつた時は夜中に家に帰り怒られた事もあった。付属に入ってから訪れるのは初めてではないだろうか。

かなり広いと思つていた境内も、今改めてみるとこぢんまりとした印章で、おまけに俊樹以外、訪れている参拝客は誰もいなかった。ましてや地元の小さな神社など、日々の参拝で訪れるような者はいないのだろう。

<俊樹>

「それにしても大変だな。毎日掃除するのか？」

<環>

「これも巫女の務めの一つですから」

俊樹が声をかけると、環はそう言つてにつこりと笑う。

俊樹はふと境内の隅にある樹に気付いた。

巨大な槇の樹で、樹齡何百年というところだろう。

御神木らしく、周囲には柵が設けられている。

<俊樹>

こんな樹あつたか？

子供の頃から何度となくここに遊びにきていたというのに、こんな大きな槇の樹があつたことは覚えていなかった。だが、なぜか懐かしい気分になるのだ。

<環>

「相楽様、どうかなされたのですか？」

ジツと槇の樹を見上げている俊樹に、環が不思議そうに訊いた。

< 俊樹 >

「いや、この樹になんとか見覚えがあるような気がするんだが……」

< 環 >

「見覚え、ですか？」

< 俊樹 >

「ああ、でもよく思い出せないんだ」

思い出そうとするのだが、すぐに霧がかかって思い出すことが出来ない。

< 俊樹 >

「ああ、やめだやめ!!」

俊樹は頭を掻きむしって、環の方を振り返った。

< 俊樹 >

「考え込むのは性に合わない」

< 環 >

「相楽様らしいですね」

環はクスクスと笑う。

< 俊樹 >

「そういえば、神主さんの姿を見ないけど？」

< 環 >

「以前の宮司さんが体調を崩してしまったんですが、今までいた神社の都合もありまして……」

<俊樹>

「じゃあ、今は環だけ？」

<環>

「ええ……父は来週から。とりあえず巫女だけでも早く来て欲しいと言われて」

<俊樹>

「それでこの時期に転校して来たわけか」

担任が言っていた『神社である家庭の都合』とは、そういう意味だったらしい。

<環>

「はい、それに学校の事も……」

<俊樹>

「学校？」

<環>

「あつ、いえ……なんでもありません」

失言してしまったという感じで口元を押さえると、環は急に俊樹から目を逸らした。

<俊樹>

「何か言いにくい事か？」

<環>

「……………」

俊樹の質問に、環はちょっと困ったような表情を見せる。
許婚に対して隠し事はしたくないが、話すには支障がある………という感じがした。

<俊樹>

「言いにくい事なら無理に訊く気はないけど、困ったことがあるなら言ってくれ。助けになるぞ」

<環>

「はい、ありがとうございます。でも大丈夫ですから」

気にはなったが、そう無理に訊く事はない。

環が本当に困って助けを求めて来たら、その時は力になってやればいいのだから。

<俊樹>

「ところで……………」

俊樹は気分を変えるように、かねてから気になっていたことを訊いてみた。

<俊樹>

「巫女って実際には何をやってるんだ？」

<環>

「そうですね……………」

環は少し考えてから、『色々な事です』と曖昧な言い方をした。

<俊樹>

「色々ねえ……」

<環>

「逆にお訊きしますけど、相楽様は巫女がどんな事をしていてお
思いですか？」

<俊樹>

「うーん……そうだな」

改めて訊かれると返答に困る。

<俊樹>

「おみくじや、お札を売ったりとか……」

<環>

「そうですね。それも巫女の仕事です」

<俊樹>

「でも、それだけじゃないんだろ？」

<環>

「神に使えて神事を行い、神意を伺って神託を告げるといのが巫
女の仕事ですが、実際には雑用をこなすことの方が多いですね」

環は苦笑するように言った。

そう言えば、先程の境内の掃除も巫女の務めの一つだと言っていた

はずた。

<環>

「あと、お茶やお琴や舞も習ったりしますけど」

<俊樹>

「へえ……舞か」

<環>

「お祭りの際、祈願者の前で舞うんです」

<俊樹>

「そういや、そんなのをテレビか何かで見たような気がする」

結構、綺麗な舞であつたような記憶がある。

環がその舞を踊るといふのであれば、是非とも見てみたいものだ。

<俊樹>

「なあ、その舞ってやつをちょっと見せてくれないか？」

<環>

「私の舞を、ですか？でも、まだお見せするほどのものでは……」

環は小さく首を振って、俊樹の願いを拒絶した。

人に見せられるほどのレベルではないのか、それとも神事に関わるために、簡単に披露できるものではないのか。

どちらにしても環にはそのつもりはないようだ。

<俊樹>

「そっか、残念だ。でも、いつか見せてくれると嬉しいな」

<環>

「そうですね。では、いずれ」

<俊樹>

「ああ、楽しみにしているよ」

俊樹は本心からそう言った。

いずれ……というのがいつになるのか分からないが、二人の深い絆とやらが本物であるなら、俊樹達はこの先もずっと一緒にいるはずなのだから。

SCENE 26 (前書き)

評価・感想等を書いていただけると幸いです。

SCENE 26

純一は夢を見ていた。

いや、正確にいうのなら『見せられている』だ。

純一は薄暗い部屋の中に立っていた。

辺りを見回してみるが、机と椅子、ベッドがあるだけの殺風景な部屋だ。

純一の正面には窓があり、その側には椅子に腰掛け、外の様子を眺めている一人の少女が見える。

彼女は窓から差し込む太陽の光りで逆光となり顔はハッキリと見えないが、長い髪を後ろで束ね、おしとやかな雰囲気醸し出し、どこかの令嬢といった感じに見える。

彼女の膝の上には猫が丸くなつて乗っていた。

そこまでは何の不思議もないのだが、純一の脳裏にある一つの疑問が浮かんだ。

それは、今まで『夢を見せられる』時は、自分の知っている人だけだったのだが、今自分の目の前に座っている少女は見たことが無いということだ。

「いい天気……」

窓から外をぼんやり眺めて呟いた。

「今日もあの人に会えた……でも彼の隣で楽しそうに歩いているのは、黄色いリボンの娘は彼女かな？」

上に向いていた視線が下に移る。

彼女は外を歩いている二人……いや、男と一緒に学校に向かって歩いていた女の子を羨ましく思った。

「彼と一緒に学校に通えたら……」

楽しそうに歩いている二人を眺めながら呟く。

「でも……無理よね……お父様、絶対お許しにならないよね……」

少女は猫を呆然と見つめながら嘆く。

<純一>

「あのさ……自分の考えをお父さんに言わないと伝わらないって……」

相手にこの声が届かないとわかっているが、それでも純一は言わずにはいれなかった。

何の役にも立たないこの能力が、せめて相手に自分の声が届けば、多少はこの能力も役に立つのだが……。

「あの人と一緒に学校に行けたら、どんなに楽しいか……でも、あの人と話すチャンスがあれば……」

<純一>

「そりゃ無理だって、こんな部屋に閉じこめても、ソイツと話しながら出来ないって。まずは部屋から出て話し掛けないと……」

彼女に届くわけない。

当たり前だ。

今の純一は、他人の夢をのぞき見しているだけなのだから。

「頼子……お前はいいわよね……自由に外に出られるんだから……」

頼子と呼ばれた猫の背中を撫でながら言った。
すると頼子はスツと立ち上がり、窓から飛び出して行った。

「あつ 頼子……!!」

彼女は窓から出ていた頼子をただ眺めていることしか出来なかった。

ジリリリリ

部屋の中に、目覚まし時計の騒々しい音が鳴り響く。

純一は手探りで、サッカーボール型の時計を探し当て、スイッチを切り、寝ボケ眼で時計を見る。

8時30分

<純一>

「ヤバ！遅刻だ!!」

純一はガバツと勢いよく起き上がり、ベッドから降りるが……

<純一>

「かっ たりい……今日はサボるか……」

純一はサッカーボール型の時計をベッドに放り投げた。

<純一>

「こんな時間に学校に行ってるヤツの気が知れないね」

着替えを済ませた純一が向かった先は桜公園だ。

初音島の中央にある事から、『初音島中央公園』と名付けられているが、一年中枯れない桜の木が咲いているため、島民からは『桜公園』と呼ばれ親しまれている。

「この妖怪めー」

<純一>

「ん、何だ？」

純一が見ると、小学生と思われる子供達が、五、六人で何かを囲んでいた。

恐らく、子供達の言う『妖怪』と呼ばれていた生物だろう。

<純一>

妖怪ねえ……この島には、一年中枯れない桜の木やら、出来そこないの魔法使いやら、十年前から姿の変わらない子供つてのもいるからな……今更何を見ても、そう簡単に驚かないつての……

純一は子供達の横を通り過ぎようとしたが、子供達に苛められている『妖怪』とやらの興味が沸き、通り過ぎることが出来ずチラッと子供達の頭上から『妖怪』とやらを覗き見る。

長い髪に、端正に整った顔立ち、どこかおしとやかな雰囲気醸し出す女性がその場でうずくまっていた。

一見普通の女性のように見えるが、おかしい所が二つあった。一つ目は、なぜかメイド服を見に纏っているという事、二つ目は、頭に猫耳が生えているという事だ。

<純一>

なぜにメイド服？そして、なぜに猫耳？

さすがの純一もこれには驚いた。

見てしまったからには放っておく事もできず、純一が一番嫌いな『かつたるい』事をする。

<純一>

「おい」

純一は近くにいた少年の右肩を左手でポンツと軽く叩き、少年が振り返ると純一はガン飛ばした。

左足は少年の方に向け、右足は少し離れた所に九十度の角度で置き、右手はポケットに入れ、左手は握り拳を作り、顔はえぐるように睨む。

<純一>

「何してんだ、コラ！！」

その顔を見た子供達は泣き叫んで逃げていった。

<純一>

まさかアレがこんな形で役に立つとは……

純一がやったガン飛ばしの方法は以前、要から聞いた無駄知識だ。トリ〇アの泉でも絶対使われないだろう。

純一は『こうやってガンを飛ばせば大概のヤツは逃げていって、何かと役に立つぞ』と要が言っていたのを思い出した。しかし、その時は『役に立つことはないし、絶対使うことはないだろう』と思っていたのだ。

純一はかったるそうに、頭を掻いた。

つづく

SCENE 27

<純一>

「大丈夫か？」

純一は子供達を追っ払った後、ネコ耳にメイド服を着た少女に話し掛けた。

<頼子>

「あの……助けて下さって、ありがとうございます。私、鷺澤頼子と申します」

頼子は正座へと姿勢を正し、深々と頭を下げる。

<純一>

「これはご丁寧にも……俺は朝倉純一と言います」

丁寧に自己紹介をする頼子につられ、純一もその場で正座をすると、深々と頭を下げた。
端から見ればお見合いをしてるようだ。

<純一>

「無事みたいだし、じゃあ俺はこれで……」

立ち上がり、その場を去ろうとした純一の服を頼子がギュッと掴んだ。

<純一>

「まだ何か用……？」

< 頼子 >

「えっと……あの……」

何かを言いたげな頼子だったが、ある人物がそれを遮る。

< 杉並 >

「フツ……相変わらず鈍いな、朝倉」

< 純一 >

「杉並！お前一体いつからそこに……？」

いつの間にか杉並が、頼子の隣で腰を下ろしていた。

< 圭一 >

「何、今し方だ……」

答えたのは純一の背後にいた圭一だ。

圭一は頼子へと近づき珍しそうに眺めた。

< 純一 >

「神出鬼没だな、お前達は……」

純一は呆れながら二人を見る。

< 頼子 >

「あの……この方達は？」

頼子は恐る恐る純一に尋ねる。

<純一>

「ああコイツ等は杉並と北川で……まあダチみたいなものだ」

その『ダチみたいな二人』はというと、ポケットから取り出した虫眼鏡で頼子の頭にあるネコ耳に近づけ叫ぶ。

<杉並>

「見よ！生きた化石だ。リアルミステリーが、今我々の目の前で息をしてるのだぞ！」

<圭一>

「くあ　！ネコ耳とは参った。盲点だった」

なぜか悶えながら言う圭一。

<杉並>

「その立派なネコ耳は本物なのか？」

頼子の耳を触ろうと近づくが、純一が杉並を止める。

<純一>

「お前ら、失礼だろ……その剥き出しの好奇心を仕舞え」

<圭一>

「では朝倉、お前は気にならんと云うのか？触れてみたいとは思わんのか？」

頼子の隣で腰を降ろしていた圭一が問い質す。

<圭一>

「フツ……冗談はそれくらいにして、時に朝倉、お前まさか彼女をこのまま放っておく気か？」

<純一>

「俺にどうしろと？」

<杉並>

「幸いお前の両親は海外赴任中、空き部屋があるではないか」

純一によって捕獲された杉並だったが、いつの間にか脱出して純一の背後に回っていた。

<純一>

「えっ……マジか？」

「ママ、アイツだよ。僕が遊んでいたのに邪魔したのは……」

純一、杉並、圭一、頼子の四人が声のした方を向くと、そこには先ほどの子供がいた。

その隣には、コレステロールのとりすぎで立派な贅肉を身に纏い、派手な恰好に、厚化粧、インテリ眼鏡をかけたオバサンが立っていた。子供は母親を引き連れてきたのだ。

「まあ！いい歳して、私の可愛い坊やを苛めるなんて許せないザマス！」

<杉並>

「おお！あれはザーマスおばさんではないか」

感慨深げな声を上げる杉並に首を傾げた純一が問う。

<純一>

「ザーマスおばさん？何だそれは？」

<圭一>

「現代では既に絶滅したと言われているザーマスおばさん、ミステリーだ」

杉並列びに圭一の両名の興味の対象が頼子から『ザーマスおばさん』なる人物に移り変わったが、今の純一にとってそんな事はどうでもいい事だった。

<純一>

「杉並、北川後は任せた！俺は一先ず逃げる。行くぞ頼子さん」

<頼子>

「あつ、はい！」

純一は頼子の手を引き、杉並、北川の二人を咄にして逃げ出した。

<圭一>

「ではまたお会いしましょう、生きた化石のお嬢さん！」

ドドド

地響きのような音がする。

二人が『何の音だ？』と不思議そうな顔をして、音のする方を見ると『ザーマスおばさん』が二人目掛けて突っ込んできた。

「邪魔ザマス！！」

<杉並・圭>

「ぐはっ　　!？」

『ザーマスおばさん』は二人を突進して吹き飛ばし、純一と頼子の後を追った。

つづく

SCENE 28

朝倉家

<純一>

「ハアハア……さすがにここまでくれば……」

純一は呼吸を整え、搾るように声を出した。

<純一>

取り敢えずこれで一安心……あとは……

呼吸を整えた純一は安堵の息を漏らす。

純一は毎日のように朝から走っているため、少し間をおけばある程度呼吸が調うようになってきたのだ。

玄関口で座り込んでいる頼子をチラッと見る。

こちらは純一とは違って未だ呼吸が調っていないようだ。

<純一>

「落ち着いたら送っていくよ」

<頼子>

「えっ、私ここから出たくありません」

頼子は絶るような思いで純一の服の裾を掴んだ。

<純一>

「……ああいう事があって外に出たくないって言う気持ちはわかるよ。でもそうしたら自分の家に帰れないだろ？」

すると頼子は目を伏せて聞き取るのがやっとの位の小声で話した。

<頼子>

「いえ……違うんです。あの実は私……その……家が……」

純一は『まさか』とは思ったが、『そんな事あるはずない』と自分に言い聞かせる。

しかし、次に放たれた頼子の一言で『それ』が現実のものになる。

<頼子>

「家が……無いんです……」

<純一>

「……やっぱり」

<頼子>

「あの……もし宜しければ、私をここにメイドとして置いてくれませんか？」

頼子は再び縋るような思いで純一を見上げた。

<頼子>

「あの……見た通り私はメイドですから……」

<純一>

「そりゃそうだけど……」

<頼子>

「料理でも、洗濯でも、掃除でも何でも言って下さい」

純一は素直に頷けなかった。
それには理由があったからだ。

<純一>

そんな事したら音夢に何て言われるか……

こんな可愛い子が『ここに置いてください』と言われて断る理由がどこにあると言っのだろうか。

一人暮らしなら迷わずOKしてしまうところだが。

しかし、そう出来ないのは音夢がいるからだ。

拾ってきた犬や猫だったら何の問題もない。

だが、生憎こちらは普通の人間だ。

まあ、ネコ耳があると云う点では『普通』とは言えないような気はするが……。

ネコ耳とメイド服を着ていると云う点を省けば、間違いなく人間なのだ。

<頼子>

「ダメ、ですか……？」

暗い表情で呟くが、上目使いで純一を見ている。

正直言つて純一は、この目に弱い。

理性が崩壊しそうだったが、なんとか保つ事が出来た。

<純一>

「えつと……取り敢えず今日は……と云う事で……」

<頼子>

「はい！ありがとうございます。それで、私は何をすればいいです

か？」

<純一>

「え？うん……そうだな、じゃあ掃除から頼むよ」

<頼子>

「はい！頑張ります」

頼子は意気込む。

それを見送った純一は着替えるため二階へ上がろうとする。
しかし、『キヤア』と言う頼子の叫びを聞いて、その場に立ち尽くす。

<純一>

「大丈夫？頼子さん……」

純一が見ると、なぜか頼子は掃除機に追われていた。

<頼子>

「純一さん、助けてくださーい！」

純一は掃除機のコンセントを抜いた。

<頼子>

「ありがとうございます。純一さん……」

<純一>

「えっと……掃除はいいから、洗濯を頼むよ……」

<頼子>

「はい、任せてください！」

先程と変わらない意気込みを見せた。
それが逆に純一を不安に陥れる。

<純一>

大丈夫かな……？

と不安になりつつ、再び二階に上がろうとした。

しかし、また頼子の『キヤア』と言う叫び声を聞いて、洗面所に急いで向かう。

すると、洗濯機から泡が吹き出していて、洗面所が泡塗れになっていた。

<純一>

「……一体何をやったの？」

洗面所の泡をタオルで拭き取りつつ頼子に訪ねた。

<頼子>

「はい……実は……」

頼子の話では、洗剤を全部入れたとの事。

<純一>

そりゃ、こうなるよ……

純一は頼子に着替えさせて、二階へと上がり、濡れた頼子のメイド服……衣服を干した。

<純一>

「今までどうやって生活してたのやら……」

<頼子>

「すみません……」

<純一>

「まあ、慣れないうちは仕方ないよ」

<頼子>

「ありがとうございます……お優しいんですね」

<純一>

「そんな事無いよ……」

純一は、照れ隠しのため頼子から視線を逸らした。

しかし、純一が視線を逸らした先には、ブラジャーが干されていた。サイズはかなりデカイ。

<純一>

へえ………頼子さんって、結構ナイスバディ？

等と不埒な考えまで浮かび、純一は慌てて首を振る。

<純一>

しかし………頼子さんの、あのネコ耳は本物？

純一は階段を下りながら、頼子のネコ耳を凝視した。

先に頼子が下りているため、純一は頼子のネコ耳を見下ろす形になる。

純一の中から湧き出る好奇心に逆らえず、少しずつ頼子のネコ耳に

純一の右手が近づく。

そんな純一の不穏な動きを察知したのか、頼子が振り向いた。

純一は慌てて右手を引っ込めるが、その拍子で足を滑らせ頼子を巻き込んで、派手に転げ落ちた。

さらに運の悪いことに、玄関のドアが開く。

<音夢>

「ただいま」

帰って来たのは無論音夢だ。

<音夢>

「……………」

<純一>

「……………」

純一と音夢の視線が合った。

しばし、朝倉家を静寂が包み込む。
時間にして、ほんの数秒。

<純一>

「やあ、音夢。おかえり……………」

先に口を開いたのは純一だ。

<音夢>

「に……………兄さん……………！一体、何をやってるんですか……………！！！」

音夢の怒りが純一に向かう。

まあ、無理も無い。

純一が、メイド服を着た頼子押し倒している形になっているのだから。

端から見れば、メイド服姿の頼子に欲情し、純一が押し倒しているようにしか見えない。

<純一>

「違うんだ、音夢……これには、深い理由が……！」

<音夢>

「一体、どんな理由があつてこんな玄関先で押し倒してるんですか……！」

純一は弁解しようとするが、音夢は聞く耳持たなかった。

SCENE 29

<さくら>

「パンパカパン！これから、頼子さんのメイド最終試験『料理テスト』を行います」

なぜか、さくらはノリノリだ。

<音夢>

「どうして、さくらちゃんがここにいるんですか？」

音夢はうたまるを頭に乗せたさくらに訊いた。

<さくら>

「うにゃ、審査員は多い方がいいでしょ？ねっ、うたまる」

<うたまる>

「ニヤー」

純一と音夢が頼子の処遇をどうしようか揉めていた時に、さくらは玄関のチャイムも鳴らさずにいきなり入ってきたのだ。

<さくら>

「それにしても音夢ちゃん、こんなのよく許したね」

音夢の性格からすれば、『ダメです』とたった一言で切り捨てると思っていた。

そのため、『料理テストの結果を見て、それから判断します』と言ったのが以外だったからだ。

だが、それには理由が合った。

<純一>

「なあ、音夢。よく、考えてみる。頼子さんの料理が超一級絶品料理だとしたら、俺達の食生活に希望の光りが差し込むんだぞ」

純一が言うように、今まで惣菜、コンビニの弁当、店屋物のローテーションだったのだ。

もし、頼子の料理が超一級絶品料理だとしたら、今までのローテーションは無くなるという訳だ。

音夢をそう言い含めた純一はというと、食材の買い出しに向かった。料理なんてしない……と言うか、出来る人間がこの家にはいない。そのため、冷蔵庫の中に食材なんて何も入っていないのだ。

<音夢>

「卑怯です、兄さん。あんな説得するなんて……」

だが、純一の言うように音夢もいい加減、あのローテーションは飽きていた。

まあ、そんな生活を何年もやっていれば、飽きてくるのは当たり前だが。

だから、音夢は無下に断る事ができずにいた。

<純一>

「ただいま」

買い出しに行っていた純一が帰ってきた。

<純一>

「とりあえず、こんだけあれば何とかなるだろ」

買ってきた食材をテーブルの上に置いた。
その量は、今まで朝倉家の冷蔵庫に入っているのが見た事ないぐらいに多く、フルコースを作っても食材が余るだろう。

<純一>

「それじゃ、頼んだぜ頼子さん」

僅かな希望を胸に抱き、純一は頼子に託した。

<頼子>

「はい！任せてください」

頼子は意気込んだ。

その姿を見た純一は、期待と安堵が入り混じった表情を浮かべる。

<頼子>

「ところで、これは……何でしょう？」

近くにあったキャベツを取り、尋ねた。

<純一・音夢・さくら>

「……」

純一の期待と僅かな希望とやは、脆くも崩れさった。

それから数十分後。

<頼子>

「あの……どうですか？」

頼子の料理を食べた三人と一匹は

<さくら>

「……甘くて……苦くて……ベトベトしてて」

<音夢>

「目に滲みる……何なのコレ？」

<頼子>

「えっと……湯豆腐です」

頼子は自信なさ気に言った。

出された料理はもはや、『湯豆腐』では無かった。

見た目は紫色した液体の中に、なぜか緑色の豆腐が浮いていて、臭いは未知なるもので、味はと言うと、音夢の殺人料理にも引けはとらないだろう。

その事は、口が裂けても音夢の前では言えないが。

<純一>

「……どうやったら、普通の食材からこんな刺激物が出来るんだ？」

純一は悶えながら、声を絞り出した。

<頼子>

「あうう……また失敗でした……」

<音夢>

「兄さん！どうするんですか？これから」

音夢は純一に詰め寄り、問い質す。

<純一>

「……どうするって言われてもな」

<さくら>

「……そんな事より、ボクお腹減った
たい食べたい食べたい!!」

!!何か食べたい食べ

さくらが両手をブンブンと振り回し、駄々をこねた。

その姿はまるで、子供が駄々をこねているようにしか見えない。

「フツ……そんな事もあるのかと」

四人は声のした方を振り向くと、杉並がソファーに腰掛けていて、彼の右手には白い袋が握り締めていた。

<純一>

「おつ、それは!オレの大好物の押野屋の牛丼、しかも特盛りのつゆだく!やっぱ、持つものは友達みたいなやつだな」

純一は、杉並がどこからこの家に入ったのか?

また、なぜここに居るのか?

その疑問は、問わなかった。

杉並に問うただけ無駄だと言う事が分かっていたからだ。

純一達は杉並から、牛丼を受け取り、食べ始めた。

SCENE 30 (前書き)

やっと、頼子初登場編が書き終わりました。でも、この小説はまだ続くので全部読んで、面白いと感じていただければ光栄です。

感想・評価して下さい。

SCENE 30

純一・音夢・さくらとなぜかつたまるの三人と一匹は、杉並が持ってきた牛丼を食べていた。

<杉並>

「ところで、朝倉。サギーの処遇は決まったのか？」

<純一>

「サギー？ 頼子さんを変な名前で呼ぶな」

<音夢>

「その話はしないで下さい」

牛丼を食べ終え、人数分のお茶をいれた音夢が杉並の言葉を遮った。その表情は少々ご立腹のように見える。

<音夢>

「先ほどの料理テストで全てのメイド適正試験が終了しました。その結果、メイドさんとして不適合と決まった事ですから」

<頼子>

「えっ！ そ……そんな……頑張りますから、全部出来るように頑張りますから、お願いします」

頼子は目に涙を溜め、上目遣いで音夢に必死に懇願する。

音夢も純一同様、この目には弱い。

しかし、音夢は純一とは違い強い意志がある……はず。

<音夢>

「うう……頼子さんが一生懸命なのはわかるけど……でも、やっぱり」

<杉並>

「やはり、何もわかっていないな朝倉妹よ」

音夢が言いかけて、今度は杉並が遮った。

<音夢>

「何がですか？」

<杉並>

「重要なのは、メイドとしての適性などでは無く、一番重要なのはサギーがネコ耳の持ち主だと言う事だ！」

杉並は、ビシツと人差し指で頼子を指差して言った。

<音夢>

「……はい？」

音夢は目をパチパチと瞬きさせて、杉並を見据えた。

音夢やさくらは、イマイチ杉並の言っている事が理解できない、と言っような顔をする。

これが普通の反応だ。

約一名を除いてはリアクション無しと言う結果が出た。

杉並と長く関わっていたため、多少の事では動じないのだろう。

<杉並>

「この謎を解明せずして、何がミステリー博士か！」

<純一>

「要するに、頼子さんを身近な所に置いておきたかっただけだろ」

<杉並>

「おお、珍しく察しがいいな朝倉」

杉並は、悪びれた様子も無くサラッと云つてのけた。

本来ならここで反論するべき所なのだろうが、杉並に反論した所で無駄だと言ふ事が身に染みてわかつていた。

そのため、反論する気力すら失せる。

<音夢>

「それで、なんで家なんですか？杉並君の家にでもいいじゃないですか！」

未だ納得のいかない音夢は、杉並に吠える。

そんな音夢を、『杉並相手にそんな吠えるな』と言つような感じで見ていた。

杉並に吠える音夢を見ると、純一は『いい加減覚えろ』と思つ。

<杉並>

「先程、朝倉にも言つたが生憎、家には空き部屋が無い。しかし朝倉の家なら空き部屋の二つや二つぐらいあるだろう」

<音夢>

「それはそつですけど……」

最終的には音夢が杉並に言いくるめられるのだ。

<杉並>

「それとも、どこにも行く宛の無いサギーを外に放り出すのか？」

<音夢>

「うつ……それは……」

音夢が口ごもった。

なんだかんだ言いながらお人好しの兄妹なので、そんな事は出来ないのだ。

さて、音夢と杉並の争いの元凶となっている頼子はというと、牛井をジーツと見つめていた。

<頼子>

私も……せめてこれくらい作れたら……

頼子は牛井を掴み、恐る恐る口に運ぶ。

そんな事が起きているとは知らず、純一は音夢と杉並の争いを呆然と眺めていた。

<頼子>

「……」

頼子の顔がだんだん赤みを帯びていく。

<頼子>

「熱　　い!」

頼子は叫びながら、牛井を放り投げた。

運の悪い事に、牛井を食べているうたまるの頭に落ちた。

<うたまる>

「ニヨ……!？」

事態に気付いた純一、音夢、さくら、杉並の四人は呆然と頼子と牛井を頭に乗せたうたまるを見つめた。

<純一>

「……」

<音夢>

「……」

<さくら>

「……」

<杉並>

「……」

しばらくの間、静寂が朝倉家の居間を包んだ。

<うたまる>

「ニヤニヤニヤニヤ!！」

余りの熱さにうたまるが暴れ出す。

<さくら>

「うたまる!」

<うたまる>

「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤ!！」

ガッシャ ン！

うたまるは居間で暴れ、食器を何枚か割り、二階へと上がると音夢の部屋で暴れ、純一の部屋で暴れ回った。

翌日 。

ジリリリ

純一は寝ぼけ眼で、時計を手探りで探す。

ガチャッ

何とか時計を見つけ、目覚ましを止める。
時計を手に取り、時間を確認する。
時刻は8時20分を過ぎていた。

<純一>

「やっべ、遅刻する！」

純一はガバッと起き上がり、制服に着替え、階段を下りた。

<純一>

「あれ？」

居間に行くと、頼子がソファで猫みたいに丸まって、スヤスヤと寝息を立てて眠っていた。

<純一>

ああ、そうか……昨日、牛丼食って、その後……

純一はソファで丸まって寝ている頼子を見て、昨日の出来事を思い出した。

あの後、純一達は部屋中を掃除して、終わったのは夜中だったのだ。そう考えると、頼子が熟睡しているのも頷ける。

<純一>

「ん？何だ、コレ？」

純一がふと見ると、テーブルの上にラップのかかった牛丼が置いてあった。

純一が再び頼子を見ると、頼子の側には料理本が開いた状態でソファから落ちていた。

<純一>

あれから一人で、この牛丼を……頑張り屋さんなんだな頼子さん……

再びテーブルに視線を移すと、牛丼の隣りに一枚の手紙がある事に気付き、目を通した。

『兄さんへ

先に学校行ってます。

頼子さんの事は取り敢えず、保留って事で。

音夢』

こうして再び朝倉家に平穏が訪れたと共に、新たに住居人が増えたのだった。

SCENE 31 (前書き)

今回は花見編。

純一達は一体どうなることやら。

感想・評価をしてください。

SCENE 31

晴れ渡る青空。

四月だが、まだ弱冠肌寒い。

時刻は昼を過ぎていた。

そんな中、純一、音夢、さくらの三人は桜公園を歩いていた。

今日は日曜日で、本来なら純一はまだベッドの上でぬくぬくと布団の中に丸まっている時間なのだが、なぜ桜公園を歩いているのかと言つと、話は二日前に遡る。

<さくら>

「お花見しようよ

!!」

と駄々をこねた……もとい、さくらが唐突に提案されたその一言で今日の出来事の始まりだった。

<純一>

「あゝあ、まったくよ……いい天気だな」

ノリノリの音夢とさくらとは違って、純一はかったるそつだ。

<純一>

かったりい……こんな天気の良い日は二度寝すると気持ちいいんだよな……

等と考えながら天を仰いだ。

<さくら>

「そうだね、絶好のお花見日和だね」

<純一>

「要するに、皆で騒ぐための口実が欲しかったただけだろ？」

<さくら>

「エヘヘ でも、お花見したかったのはホントだよ。ボク、初音島の桜は久しぶりだから」

純一の左隣りを歩いていったさくらが、嬉しそうな声を上げた。

<音夢>

「改まって皆でお花見するって言うのは、それはそれで楽しそうじゃないですか」

純一の右隣りを歩いていた音夢はウキウキしていた。

花見をすると言う事がわかり、今朝から非常に機嫌がいい。

純一は訝しげに音夢を見る。

音夢の機嫌がいい時は、大概純一にとって悪い事態に陥るのだ。

<純一>

「時に音夢、その手提げは一体……」

純一は不安を押し殺し、音夢の持っている手提げを見て尋ねた。

音夢が持っている手提げは、ちょうど弁当箱が入る位の大きさだ。

純一は『イヤな予感』がした。

この『イヤな予感』は、一度も外したことなく百発百中だ。時々、『自分はニュータイプの素質があるのでは?』と思えることがある。純一は心の底で、自分が思い描いている物が外れていることを願った。

<音夢>

「兄さん、その……怒らない?」

<純一>

「俺に怒られるような事を仕出かしたのか?お前は……」

純一の『イヤな予感』は的中した。

どうやら、まだまだ無敗神話は続きそうだ。

<純一>

「弁当は要らないと、あれほと言っただろ……」

<音夢>

「だ、だって……お弁当は皆で持ち寄りなんでしょ？ 私達だけ持つて行かないなんて、ルール違反じゃない！」

この花見をやる際、弁当は持ち寄りと言うことに決まったが、さくらを始め、美春も音夢の料理がどれだけ危険か、身に染みて知っていた。

そのため、音夢には弁当を持ってこなくていいと釘を刺したのだ。
朝倉家の食事情を理解した上での配慮だったのだが、朝倉家の食^フ物殺人者は、お気に召さなかったようだ。

<音夢>

「兄さんの分のお弁当は、私が責任持って作ってきましたから」

何気に『死の宣告』をサラリと言った。

<純一>

「かったりい……」

純一はぼやきながら、目的地へと歩く。

<じとり>

「朝倉君、ちわっす」

目的地に到着した純一を出迎えたのはことりだった。
花見の場所は、この初音島で最も大きい木の下だ。

昔、純一とさくらが秘密基地と称した場所でもあり、廣隆、俊樹、
信幸、要、圭一の五人が初めて出会った場所でもある。

<廣隆>

「よっ、朝倉。両手に花か？羨ましいね」

次に声をかけたのは廣隆だ。

<純一>

「この二人だけは勘弁してくれ」

嘆いて返した。

<音夢>

「何か言いましたか？兄さん！」

<さくら>

「何か言った？お兄ちゃん！」

純一の後を追ってきた音夢とさくらが、怒りの炎を生み出した。

普段は、全くと言っていいほど息が合わない。
しかし、こうゆう時の音夢とさくらの両名はなぜか息がバッチリ合
う。

<純一>

「かったりい……」

普段見慣れているこの桜も、今日は特別なんだ。と思えば、不思議
と新鮮な物に感じた。

純一は、桜を眺めながら『今日は何事もなく、無事終わりますよう
に』と願った。

つづく

SCENE 32

<眞子>

「遅　　い!!」

純一が青いビニールシートに座ると、純一の耳に届いた第一声は眞子の怒鳴り声だ。

約束の時間はとくに過ぎているため、純一は返す言葉が無い。

<萌>

「まあまあ、眞子ちゃん。せつかくのお花見なんですから、怒って
いては勿体ないですよ」

萌はいつものマイペースな口調で、眞子をなだめる。

<純一>

「さすが萌先輩、話しがわかる」

<眞子>

「はあ……もうしょうがないわね……」

眞子の左隣りで正座をしていた萌に毒気を抜かれ、再びシートに座る。

<美春>

「音夢センパ

イ!!」

ワソコ……いや、美春が尻尾を振って、物凄い勢いで音夢に近づき、抱き付いた。

<音夢>

「ちよつと美春、大きな声で呼ばなくても聞こえるから」

音夢の言う通り、音夢と美春の距離は1〜2 mしか無かった。

<美春>

「いえいえ、美春の音夢センパイへの愛は、この程度でおさまるものではありません。せめて、声だけでもと思ひまして……どうぞ、お構いなく」

<音夢>

「私は構うの! もう……」

音夢は照れ臭そうに言うと、純一の左隣りに腰を下ろした。

<杉並>

「うむ、皆揃ったようだな」

<圭一>

「待ちわびたぞ」

<純一>

「うわっ！杉並、北川」

純一の背後から杉並と圭一が、湧き出てきた。

<純一>

相変わらず、神出鬼没なヤツらだな……

純一がそう思っていると、杉並が純一の考えている事に気付いたのか、杉並が純一に言った。

<杉並>

「ふっ……朝倉お前が今、何を考えているのか手に取るようにわかる。だが、コレはいつもの事ではないか、あまり気にするな」

<暦>

「杉並の言う通りだ。いつもの事なんだから」

<純一>

「へーい。……って、暦先生!!」

担任の口調を危うくスルーする所だったが、寸前の所で食い止めた。ことりの隣りに座っているのは、間違いなく、誰がどう見ても暦だった。

<暦>

「どうしたんだ朝倉? そんな、鳩が豆鉄砲をくらったような顔して」

<純一>

「えっ? あっ……いや、その、正直意外な方がいらっしやるなあ……
……と思ひまして……」

<暦>

「なんだい、私が居ちゃあマズイのかい? それとも、何かよからぬ事でも企んでいるんじゃないだろうね?」

<純一>

「いえ、滅相もございません」

<暦>

「冗談だよ。今日はことりに誘われてね、こんな大人数で花見をやるんだ保護者の一人や二人いた方が安全だろ？」

<廣隆>

「安全？危険の間違いだよな？」

廣隆は朝倉の耳にそつと囁いた。

廣隆のこの発言が暦の耳に入れば、間違いなく人体実験の材料にされるだろう。

<暦>

「聞こえてるよ相沢」

どうやら、歳の割に耳はいいようだ。

『地獄耳』とはこう言う事だと廣隆は、理解する事となった。

<廣隆>

「……人体実験の材料だけは勘弁して下さい」

廣隆は暦に懇願するが暦は、不適な笑みを浮かべた。

<純一>

「覚悟しといた方がいいんじゃないか相沢」

純一は暦の不適な笑みを見て、廣隆に囁き返す。

< 暦 >

「まっ、そう言う事だから今日は、教師としてじゃなく、ことりの姉としてここに來たんだ。そんな堅くならなくて良いよ」

暦が言い終えると、純一は辺りを見回した。

メンバーは朝倉兄妹、さくら、工藤、杉並、水越姉妹、白河姉妹、廣隆、俊樹、信幸、要、圭一、環、ななこ、美春、アリスだ。

ちよっとした集まりのはずだったが、いつの間にか規模が拡大した。さくらが言ったように、たまには皆で騒ぐのも悪くない。

< アリス >

「先輩……ハイ……」

そう言つてアリスは純一に、ジュースの入った紙コップを手渡す。

< 要 >

「やっとこれで全員揃つたな」

要は皆の顔を見回して言つた。

その隣りに座っていた圭一が突然立ち上がった。

<圭一>

「乾杯の音頭はオレにやらせてもらおう。……今日は天気も良く、まさに絶好の花見日和……」

<信幸>

「カンパ　　イ!!」

しびれを切らした信幸が圭一より先に乾杯の音頭を取った。

<みんな>

「乾杯!!」

圭一を除いた皆が信幸に続いた。

<圭一>

「稲葉、お前な……」

<信幸>

「まだまだだな北川、こう言った場所では長つたるい挨拶は抜きだ」

そう言って信幸は、紙コップに入っているジュースを一気に飲み干

した。

そんな信幸を圭一は恨めしげに見つめる。

SCENE 33

< 萌 >

「はい、みなさん、お鍋が煮えてきましたので、どうぞ召し上がって下さい」

こんな所でも、萌は鍋を忘れないのはさすがと言っべきだろうか。物珍しそくに、皆鍋に集まって来る。

< 眞子 >

「私は止めとけて言っただけだね……」

萌の隣りに座っていた眞子が、身内の恥をさらけ出すような面持ちで、顔を覆いたため息をついた。

< ななこ >

「あれ、鍋の中にシャケが入ってますよ？」

物珍しそうにななこが、鍋の中を覗き込んだ。

< 萌 >

「はい、今日は『石狩鍋』なんですよ」

< ななこ >

「へー、鍋にも色んな種類があるんですね」

< 萌 >

「そうですね。鍋を最初に考えた人を尊敬します。そもそも石狩鍋と言っのは」

とうとう萌の鍋談義に火が点いたようだ。
こうなると、もう誰にも止められない。

< ななこ >

「フムフム……お鍋一つを取っても、様々な歴史があるんですね」

萌の鍋談義に感心しきったななこは、ポケットから手帳を取り出し、メモしだした。

< 眞子 >

「ホントだなこってメモ魔なんだから」

少々呆れ気味で言った。

その話しぶりは、まるで長年の親友であるみたいだ。

<廣隆>

「あれ、眞子はななこの事知ってるのか？」

<眞子>

「そりゃあね、小学校の時同じクラスだったからね」

<廣隆>

「元・クラスメートってやつか」

<眞子>

「と言うか、何で相沢がななこの事知ってるの？」

<廣隆>

「ん？ ああ、まあ……ヤギがな」

<眞子>

「ヤギ？」

眞子は訝しむような目で廣隆を見た。
話の内容がサッパリ見えていないようだ。

<純一>

「ヤギがどうかしたのか？」

廣隆と眞子の話に、純一と工藤が割って入ってきた。

<廣隆>

「眞子が、何で俺達がななこの事を知ってるのか、って訊かれてな」

<工藤>

「ああ、なるほどそう言う事が」

工藤は納得したように頷き、眞子は首を傾げた。

<杉並>

「時に朝倉、今日はサギーは一緒ではないのか？」

唐突に杉並が訊いた。

杉並の性格から考えると、サギー……もとい、頼子の事が気になつてしょうがないのだろう。

<純一>

「頼子さんは留守番だ」

<圭一>

「そうか、それは少々残念だ」

<廣隆>

「誰だ、そのサギーってのは？」

廣隆は圭一の言葉を遮り尋ねた。

<杉並>

「昨日、知り合った生きた化石でな……」

<廣隆>

「昨日知り合った生きた化石？ ……何だ、七年振りにいとこのいる雪降る町に行って、たい焼きを食い逃げしてる少女にでも会ったのか？」

<杉並>

「何だその話しは……？」

杉並は呆れ顔だ。

<眞子>

「相沢も相変わらずね……」

眞子はジト目で廣隆を睨む。

<俊樹>

「ハハハハ……」

そんな廣隆達を尻目に楽しんでいる者がいた。
俊樹と環である。

俊樹は環が作ってきた弁当を美味しそうに食べている。

<廣隆>

「ラブラブですな」

<信幸>

「ですな」

そんな二人の様子を見た廣隆と信幸は茶化しを入れた。
端から見れば、俊樹と環の二人の関係は恋人と間違えるほど仲が良
さそうに見える。

<信幸>

「あの二人の関係は、どこまで進んだかな？」

信幸が唐突に訊いた。

<廣隆>

「発展無しに千円」

<信幸>

「それじゃあ賭けが成立しないだろ」

<廣隆>

「なら、稲葉が発展した方に賭ければいいだろ」

<信幸>

「俺は超大穴に賭ける気は無いよ」

廣隆達は廣隆達でかなり盛り上がっていた。

<要>

「どうだ、朝倉。たまにはこうゆづのも悪くないだろ?」

要は俊樹と環を見ていた純一に話し掛けた。

<純一>

「そうだな。

たまにはこつゆつのも悪く無いかな」

要の言う通り、たまにはこつして皆で何かをやると言つのも悪くないものだ。

つづく

SCENE 34

<音夢>

「ねえ兄さ」

<純一>

「あつ、ことり。それ貰っていいか？」

純一は音夢をスルーしてことりに話し掛けた。

音夢が何を言おうとしたのか、わかっているからだ。

判断としては間違っではないが、結果としては間違っていた。

スルーすれば、音夢の怒りが倍増してしまうからだ。

<ことり>

「ええ、どうぞ」

ことりが作ったお弁当は可愛らしく、タコの形をしたウィンナーや、ウサギの形をしたリンゴやらが入っていた。

<音夢>

「ねえ、兄さん！」

音夢は純一の襟首をグイッと引っ張った。

<純一>

「ぐえっ！ どうしたんだ音夢？ トイレか？」

<音夢>

「違います！ 何で私の事無視するんですか！」

音夢は拗ねたように目を潤ませて、上目遣いで純一を見た。
そういう顔をされると、正直弱い。
でも、騙されてはいけない。
騙されれば、音夢の弁当を食べる羽目になる。
即ちそれは、純一の死を意味するからだ。

<音夢>

「他の方のお弁当を召し上がるのもいいですが……そろそろ私の作ったお弁当を食べて欲しいのですが……」

裏モード全開の笑顔で、純一を問い詰める。

音夢の弁当を食べなくても家に帰って殺^やられるし、食べても殺^やられる。

どちらにせよバッドエンドは確定だ。

<純一>

「なあ、音夢。……前にも言ったと思うが、俺はNOと言える日

本人になりたいんだ」

<音夢>

「そうですか。では私も、兄さんの意見は全て却下させてもらいますので」

純一が敷いた防衛線は、僅か3秒で崩壊した。

<音夢>

「では、兄さん。お弁当をどうぞ」

音夢は満面の笑みで、純一に弁当を差し出した。

しかし、純一から見ると音夢の笑みは悪魔の笑みにしか見えない。今、朝倉純一が生存を賭けて行える行為は三つある

1・音夢を説得する。

2・何か理由をつけて、そのまま逃げる。

3・被害を最小限に抑えるため、誰かを道連れにする。

1……は無理だろう。

意固地になった音夢を説得するのは、至難の業だ。

それどころか、自分の首を余計に絞める結果にしかない。なら、2は……こちらも無理だ。

今は逃げ出せたとしても、帰る家が同じなので、後でどんな報復が

あるのかわからない。

では、3ならどうだ？

音夢の持っている弁当箱のサイズから見て、量は一人分だ。

それを一人で食べるとなると、純一の意識の致死量を軽く越える。

<純一>

「……と言つ訳で、付き合え！ さくら、相沢」

<さくら>

「うにゃー!!」

<廣隆>

「うわっ!!」

鍋を囲っていたさくらと相沢の襟首をぐいっとなぐらった。

<さくら>

「今日はいつになく大胆だけど、どうかしたのお兄ちゃん？」

<純一>

「なあ、さくら。俺の事好きか？」

<さくら>

「うん……うん。好きだけど……」

<純一>

「そうか……なら、俺と共に死んでくれ」

<さくら>

「……ごめんね、例えお兄ちゃんの頼みでも、それは出来ないよ。ボクは生きてお兄ちゃんの愛を感じたいし……それに、ボクには地獄を見に行く勇氣は無いな……」

さすがに付き合いが長いだけあって、純一の言おうとしている事が理解しているようだ。

純一はさくらの説得を諦め、もう一人の生け贄の説得を試みた。

<純一>

「なあ、相沢。俺達、親友だよな？」

<廣隆>

「ああ……無論だ、友よ！」

<純一>

「それなら、俺と共に……」

<廣隆>

「……生憎だが、俺はまだ死ぬ気は無い」

廣隆もさくら同様、音夢の弁当を食べる事を拒んだ。

以前、純一と共に音夢の弁当を食べて生死の境を彷徨った事があった。

そのため、音夢の料理がどれだけ危険か、身に染みてわかっているのだ。

<廣隆>

「それにな……音夢さんが作ってきた弁当は一人分だろ？ それを二人で半分で食べば、あの時の二の舞だ」

廣隆が言う『あの時』とは、2年前に廣隆が初めて音夢の弁当を食べた時の事だ。

あの時、二人で弁当を半分にして食べて、保健室送りになり、それから一週間は胃がもたれて、ともに食事が出来なかったのだ。

<廣隆>

「音夢さんの弁当を中途半端に食べて、悶え苦しむより、一気に食べて死んだ方がナンボかマシだと思うぞ」

と、廣隆は何気に失礼な事を言った。

<さくら>

「それに、音夢ちゃんが可哀相だよ。お兄ちゃんの為に一生懸命作ったんだから、受け止めてあげないと」

<純一>

「さては、お前達音夢の刺客だな……！」

<さくら>

「そんな大袈裟に言ってもダメだよ。気持ちには分からないでも無いけどね」

こちらも廣隆同様、失礼な事を言った。

<廣隆>

「朝倉、骨ぐらいは拾ってやるよ」

二人の説得を諦めた純一は、覚悟を決めて音夢の作った弁当を物凄い勢いで食べ始めた。

その後、純一が気を失った事は言うまでも無い。

つづく

SCENE 35

純一が、気を失ってから数十分が過ぎていた。
未だ、目覚める気配無し。

<廣隆>

「よく寝ているな……」

気絶している純一をつつきながら、廣隆は呟いた。
廣隆は『反応するかな?』と思いながら、つついたが、純一は反応
すらしなかった。
まるで、死んでいるかのようだ。

<さくら>

「アハハ……そうだね。」

でもきつと今頃、いい夢でも見てると思うよ」

気絶している純一を見ながら、さくらは苦笑した。

義妹の作ってきた弁当を食べて、気絶するとは災難としか言いよう
が無い。

それならせめて、いい夢くらいは見ていてほしいと願うさくらだっ
た。

<廣隆>

「いや……多分、悪夢でも見てるんだろう」

廣隆は、初めて音夢の弁当を食べた時の事を思い出した。

あの時は、気を失い、保健室で寝ていたら、音夢の弁当に追われて
いるという悪夢を見た。

そのため、廣隆には分かるのだ。

<眞子>

「それより、相沢……」

眞子は気を失っている純一を、『それ』で片付ける。

純一がなぜ気絶しているかなど、気にも止めていない様子だ。

眞子の『それ』発言を聞いた廣隆は、純一に同情すら抱いた。

妹である音夢の弁当を食べて気を失い、誰からも心配されないとは

……。

まあ……今は、皆楽しんでいるため、純一の事が眼中に入っていない
のだろう。

<廣隆>

「……可愛いそうな奴」

<眞子>

「ん？ 何か言った？」

<廣隆>

「いや、何も。……ところで、何か用か？」

<眞子>

「え？ あ……う、うん……これ、作って来たから……よかったら……その……」

眞子は顔を真っ赤にして、廣隆に怖ず怖ずと弁当箱を差し出す。

<廣隆>

「弁当？ 眞子が作ったのか？」

廣隆は、眞子の持つ弁当を訝しげに見つめた。

どうやら、警戒しているらしい。

無理も無い。

つい先ほど、弁当を食べて天に召された奴を知っているからだ。そのため廣隆は、あの世で純一と再会するのを避けようとした。

<廣隆>

「弁当ね……毒とか入って無いだろうな……俺はまだ死ぬ気は無いんで……コイツみたいに」

そう言って廣隆は、気絶していた純一を指差した。

<眞子>

「家でも多少は料理をしてたから大丈夫……多分」

眞子は自信なさげに言った。

それを見ていた廣隆は、より一層の警戒心を抱きながら、弁当の蓋を開け中身を確認した。

見た目は問題なさそうだ。

しかし、問題は味だ……。

廣隆は、眞子から箸を受け取り、恐る恐る食べ始めた。

<廣隆>

「……」

眞子は、廣隆が弁当を食べるのを固唾を飲んで見守る。

<廣隆>

「う……！　こ……これは……」

眞子の弁当を食べていた廣隆の表情が陰しくなった。
その様子を見ていた眞子が慌てふためく。

<眞子>

「え？　ちょ……ちよつと相沢、大丈夫？」

<廣隆>

「ウマイ……これ意外にウマイぞ」

<眞子>

「よかった……」

眞子は、ホッと胸を撫で降ろすが、廣隆の『ある一言』が引っかけた。

<眞子>

「ん？ 相沢、意外ってどうゆう意味よ！」

<廣隆>

「いや……見た目は完璧だが、味がちょっと……って言うか、かなりどうかなって言う弁当をさっき見てきたばかりだったからさ……」

廣隆は、またもや音夢に対して失礼な発言をした。

<廣隆>

「ウマイんだが……まあ、付け加えるなら塩加減濃いな」

廣隆の感想に、眞子の眉間にシワが寄る。
そんな事など気にも止めずに、次々と感想を言う。

<廣隆>

「ゆで卵なんて、湯で過ぎで消しゴムみたいで……」

眞子は右手を握り、発射体勢を整えた。

<廣隆>

「そうそう、それと」

ブチ!!

我慢していた眞子の堪忍袋の緒が切れた。

<眞子>

「バカ　　!!」

眞子の怒りの鉄拳が、廣隆の腹部を襲う。

<廣隆>

「ぐふっ!!」

廣隆は、そのまま天へと召されて逝った。

<俊樹>

「ん？ この二人、どうかしたのか？」

先ほどまで、環と楽しくやっていた俊樹がさくらと眞子に近づいてきた。

<さくら>

「ニヤハハ……二人は、ちょっと長い眠りにしているだけだよ」

さくらは、曖昧な返事をした。
普通の反応は、首を傾げるか、問い質すかのどちらかだが、俊樹の反応は違っていた。

<俊樹>

「迷わず成仏してくれ」

大体事情を飲み込めた俊樹は、二人に黙祷を捧げた。

<俊樹>

おそらく今は、あの世で二人仲良くやっているだろう。

等と考えながら、二人を放置し、環の元へと戻っていった。
さくら、眞子の両名も二人を放置し、鍋を囲んだ。

こうして花見は、純一と廣隆の二人の不名誉な戦死と共に幕を降ろした。

つづく

SCENE 36 (前書き)

祝アクセス数8千ヒット突破！

読んでいる方々、本当にありがとうございます。

評価・感想などとして頂ければ幸いです。

大台の1万まで、後2千！！

夢の舞台へ駆け上げ！

……って、違うか……

SCENE 36

七月を過ぎ、猛暑の影響のためだろうか、梅雨の時期だと言つのにあまり雨は降らず、季節は夏を迎えようとしていた。

<俊樹>

「次！ サード、行くぞ！」

校庭から俊樹の声が聞こえた。
その次に聞こえたのは、『カキ　ン』という、金属バットでボールを打った音だ。

<廣隆>

「ん？　俊樹か……アイツ、妙に張り切ってるな」

長年俊樹と一緒にいたが、こんな俊樹は初めて見た。
滅多に熱くなる事の無い俊樹が、ここまで熱くなるには何か理由があるのだろう。

<ことり>

「あつ、相沢君。　ちわっす」

廣隆は俊樹に魅入ってしまい、廣隆を呼ぶ声がするまで気付かなか

った。

振り返るとことりが鞆を後ろ手で持ち、廣隆を覗き込むような形で立っていた。

<ことり>

「何を見てるんですか？」

<廣隆>

「野球部の練習」

廣隆の後ろにいたことりは彼の隣に移り、校庭で熱心に野球部の後輩の指導をしていた俊樹に視線を移した。

<ことり>

「相楽君があんなに熱くなるなんて、何かあったのかな？」

廣隆同様、同じ事を思ったようだ。

普段落ち着いているヤツが、今日に限って熱くなっているのだ。

俊樹を知っているヤツは、恐らく皆『何かあったのでは？』と思われるだろう。

<信幸>

「ん？ どうしたんだ、二人とも」

信幸は部活の休憩中に廣隆、ことりの二人を見つけ話し掛けた。

<廣隆>

「いや……俊樹のヤツ、何であんなに熱くなってるんだ？　と思つてな」

<信幸>

「こんどの日曜日に練習試合があるんだ。　それで、熱くなってるんだろう」

<廣隆>

「練習試合？」

廣隆は訝しむ。

今まで何度も練習試合をやってきたはずだが、こんなに熱くなった姿は一度とも見た事は無かった。

そのため、廣隆やことりは勿論、野球部の後輩も少し戸惑っていた。

<信幸>

「ああ。　今度の土曜に海堂学園と練習試合があるから、アイツあんなに熱くなってるってワケ」

<ことり>

「海堂つて、あの海堂？」

信幸は黙って頷く。

海堂学園とは、甲子園の常連で、さらに何人ものプロ野球選手を送り出している野球の名門校だ。

だが、問題はそこでは無かった。

俊樹にとって、一番の問題とは海堂にいる、ある人物だった。

<廣隆>

「“俊也”と試合するから、俊樹のヤツあんなに熱くなってたって事が……」

これで廣隆は全てを理解した。

しかし、ことりだけは未だ話しの内容を理解できていないようだ。

<ことり>

「あの……“俊也”って誰なんですか？」

“俊也”……ことりはこの“俊也”と言うのが誰で、俊樹とどんな関係なのか知らなければ全てわからないだろう。

<廣隆>

「斎藤俊也さいとうしゅんや昔、俊樹とバッテリー組んでたヤツで、俊樹のライバルつてとこかな？」

<ことり>

「へー、そうなんだ。」

……あれ、確か前に誰かから聞いた話しなんですけど、相楽君は海堂学園から声が掛かったけど、断って風見学園に来たって……」

<信幸>

「本当だよ」

<ことり>

「でも何で風見学園に？」

相楽君の実力なら、海堂学園に行ってプロだって目指せるのに」

なぜ海堂学園に行かず、風見学園に来たのか、ことりには不思議でしうがなかった。

プロを目指す気が無いのでは？ とさえ思ったが、では、ことりはそのままずっと歌を歌い続けるのか？ と訊かれたら、頷く事も否定する事も出来ない。

そのため、仮に俊樹がプロを目指す気が無いと言ったとしても、ことりは疑問を抱かないだろう。

<廣隆>

「オレも一度俊樹に、ことりと全く同じ事を訊いたんだ。そしたらアイツ……」

『全国から、野球の上手いやつを集めてるんだから甲子園や、プロに行けるのは当たり前だ。そんな所に行ったって、つまらないし、面白く無いからな。それよりは強豪校をぶっ倒す方が面白いだろ』

<廣隆>

「……………だつてよ」

<ことり>

「アハハ……………本当に破天荒な人ですね、相楽君って」

ことりは俊樹の新たな一面を見たような気がした。

ことりの俊樹へのイメージは、冷静で熱しく冷めやすいというイメージだったが、今回の事で180 俊樹のイメージが変わった事は言うまでも無い。

つづく

SCENE 37

「ストライク！ バッターアウト！ スリーアウト、チェンジ」

一回表を終えて、風見学園は三者連続三振に抑え、幸先のいいスタートを切っていた。

<俊也>

「ふーん、中々やるじゃん」

風見学園のピッチャーを見て俊也は呟いた。

監督の話では、風見学園のピッチャーは二年だと聞いている。

海堂学園で一軍のレギュラーになれなかったものの、各地から強豪を集めて作った二軍を二年のピッチャーが抑えたと言う事は、かなりの実力だと言う事だ。

しかし、海堂学園の二軍に比べれば実力はかなり劣るが。

俊也は、風見学園のピッチャーを見て、俊樹・信幸のコンビを見ながらマウンドに向かう。

<ことり>

「ねえ、榊君。今日の試合の相手って、海堂学園の二軍ですよね？ 俊也君って二軍なんですか？」

試合を見ていて、疑問に思ったことは要に尋ねた。

俊樹があれほど真剣な眼差しをしているのだ、その相手が二軍に
いると言う事がことりには信じられなかった。

<要>

「いや、アイツは一軍だよ。恐らく、監督に頼んで今日の試合に
出させてもらってるんだろう」

そう、要の言う通りだった。

俊也は俊樹と真剣勝負したいがために、監督に頼み二軍のピッチャ
ーとしてレギュラーに入れてもらったのだ。

<俊也>

……俊樹は四番かアイツとの勝負は、次の回までおあずけだな

俊也は三人で抑える気満々だ。

自意識過剰と言われてもいい、俊也はそれだけの实力があると自負
していた。

<俊樹>

今の後輩達じゃ、三振するな。運よくバットに当てたとして
も、内野ゴロだな

俊樹もまた俊也と同じ考えでいた。

一番バッターの一年がバッターボックスに立つと、俊也は構えキャ

ツチャーのサインを見て頷く。

対風見学園戦の第一球が放たれた。

バッターボックスに立った一年は、タイミングを測ろうとするが、そんな間もなくキャッチャーミットにボールが吸い込まれたように感じた。

恐らく140kmは出ていただろう。

<俊樹>

……速い

俊也の投球を見た俊樹の背中に、イヤな汗が流れた。

今の俊也の実力なら、恐らくプロとして充分やっていけるだろう。

俊樹は俊也の実力を目の当たりにし、戸惑いを隠せなかった。

正直、自分や助っ人である信幸でも打てるかどうか……。

先程までは、後輩が打てなかったとしても、自分と信幸の二人が打てれば問題無いと思っていたが、今は二人でも打てるのか、それすらわからなくなった。

<俊也>

どうやら驚いているようだな

このバッターなら、力を押さえても三振は簡単に取れる。

しかし、俊也は全力で投げた。

それには、理由があったからだ。

ここで力を押さえて、このバッターを三振にしても、面白くないと言っ理由だ、それなら一球だけ全力で投げて、俊樹に俊也の実力を

見せつけてやろうと思いついた。

<純一>

「速え……」

純一は俊也の投球を見て驚愕の声を上げる。

俊樹や信幸は勿論の事、風見学園の後輩や、応援にきた純一達は言葉を失った。

一番打者が三振し、続く二番・三番打者も三振という結果に。

<俊也>

楽勝だな。あとは俊樹と信幸の二人だけを気をつければ、この試合勝てるだろう

守備につく信幸・俊樹を見て、バットを握り締め、バッターボックスに立った。

<俊也>

「久しぶりだな、俊樹。
戦えて嬉しいよ」

<俊樹>

「オレもだ」

言い終わると、俊樹はどう攻めるか考え始めた。

<俊樹>

さあ、どう攻めようか……まずは、コイツの苦手のコースから突いてみるか

俊樹はピッチャーにサインを送り、ピッチャーの田崎は頷くと、ボールを投げた。

俊樹の注文通り、内角低めのシンカーが投げられた。

「ストライク！」

コースは際どかったが、何とかストライクと判定された。田崎の投げた球は、内角低めでボール半分入っていたが、もし審判が違っていたらボールと判定されていただろう。

<俊樹>

「どうした、俊也？ ストライクだぞ」

ボールを投げ返して、俊也に言った。

<俊也>

「ああ、わかつてる。

……あのピッチャー、二年だと聞いたが」

<俊樹>

「そうだが、それがどうした？」

<俊也>

「いや……別に、何でも無い」

そう言つて俊也は田崎を見た。

服の上からではわからないが、そこそこ筋肉のついた男だと言ふ事はわかる。

コントロールも良し、球の早速さもある、だがこの程度の実力のヤツは、海堂学園にはゴマンという。

<俊也>

……恐らく次のコースは……

<俊樹>

次も同じコースだとコイツに打たれる可能性がある。それなら……

俊也をチラツと見ると、次のサインを出した。

田崎は、首を縦に振る。

二球目は、外角高めのスライダーだ。

これも注文通りだったか『カキ　ン！』という金属音が鳴り響いた。

俊也がバットの芯で、ボールを捉らえたのだ。

ボールはぐんぐんセンターの頭上を越え、外野のフェンスを軽々越えた。

そう、俊也がホームランを打ったのだ。

ピッチャーの田崎や応援しに来た純一達は絶句し、俊樹・信幸は唇を噛み締めた。

<俊也>

「いいピッチャーだが、海堂にはこれくらいの選手は山ほどいる。

悪いがこの試合、オレ達が勝たせてもらおう」

そう吐き捨てると俊也は一塁ベースに向かう。
風見学園は、先制点を海堂に許してしまった。

つづく

SCENE 38

二回を終わって、1 - 0で風見学園は負けていた。

<信幸>

「オレ達二人が打たないと、この試合負けるな」

信幸は呟いた。

後輩達では、手も足もでないと言う事は火を見るより明らかだ。

二回裏の攻撃は、四番の俊樹から始まり、五番信幸と続く。

俊樹はバッターボックスに立つと、バットを高々と掲げた。

そのバットの先は、明らかに俊也を指している。

俊樹は俊也に挑戦状を叩きつけた。

<俊樹>

絶対アイツには負けられない！

<俊也>

面白い……勝負だ！

俊也は不適な笑みを浮かべた。

高揚感が込み上げてくるのがわかる。

俊樹とこうやって真剣勝負するのは初めての事だ。

今まで、チームメイトであつたために、勝つために協力する事はあ

つても、真剣勝負した事は一度も無く、何度俊樹と真剣勝負してみたいと思った事か。

海堂学園に入学してからその想いは変わらず、俊樹と真剣勝負するために努力してきたのだ。

三年……長いような短いような年月を経て、今やつとこうして真剣勝負が出来るのだ、ワクワクしない訳が無い。

俊也は俊樹・信幸に対して手加減する気は無かった。

この二人は、後輩達とは違い、実力はあると考えていて、手加減などしたら、海堂学園が……俊也が負ける事は目に見えていたからだ。第一球を振りかぶって投げた。

外角低めのカーブ、判定はストライク。

続く二球目は、内角低めのシュートだ。

俊也は俊樹が見逃し、もしくは空振りだと思っていたが、俊樹はライト前に流し打ちをし、出塁する事に成功した。

続くバッターは信幸で、初球に低めのストレートをセンター前に打った。

しかし後が続かず、結局六番・七番・八番は三者連続三振に抑え、二回を終わる。

<純一>

「強いな、相楽と稲葉の二人が一点も取れないとは」

純一は本音が零れた。

俊樹や信幸の実力は、純一とて知っている。

そのため、海堂学園から一点も取れない、つまり相手がそれだけの實力があると言う事だ。

<工藤>

「相手が海堂学園だからね。むしろ、一点に抑えていると言う事の方がスゴイと思うよ」

<環>

「相楽様……」

環は心配そうに俊樹を見つめた。

この試合、1 - 0で風見学園が負ける事は環には見えていたからだ。環には予知能力という不思議な力があつた。

その能力の事は誰にも話していない。

無論、俊樹にも。

<要>

「ん？　どうかしたのか、環」

心配そうに見つめていた環に、要が話し掛けたが、環はハツとして慌てて首を振った。

<環>

「いえ、何でもありません」

<純一>

「大丈夫だよ、環。　アイツらなら勝てるって」

<さくら>

「ニヤハハ お兄ちゃんの言う通りだよ」

先程まで野球に夢中になっていたさくらは、俊樹・信幸の二人が勝てると信じていた。

勿論、さくらだけでは無く純一や音夢、応援にきた皆、俊樹達が勝つと信じている。

だが、回を重ねるに連れ、敗色濃厚となってきた。

それに加え、田崎の疲労度も増してきた、だが風見学園の選手は十二人しかいないとは言っても、そのうち三人は怪我をして試合に出ることも叶わない。

信幸が助っ人にきていて、一人だけ控えがいるがまだ野球初心者だ。そんなヤツを試合に出すわけにはいかない。

<俊樹>

アイツ遅いな……

もう一人の助っ人を待っているのは、この試合は負ける事は確実。それならばと思い、俊樹は立ち上がった。

<俊樹>

「美春、ちよつと来い」

そう言つて、俊樹は美春を手招きする。

<美春>

「何ですか、相楽先輩？」

俊樹の元に近寄つた美春は、なぜ自分が呼ばれたのかわからないと言つような顔だ。

<俊樹>

「お前に頼みがあつてな……」

<美春>

「美春にですか？」

<俊樹>

「実はな……」

俊樹は美春に耳打ちをすると、最初は話を聞いていた美春はイヤそうな顔をしていたが、次第に嬉しそうな顔に変わった。

<美春>

「お任せ下さい！ 不肖天枷美春、かならず連れてきます！！ では」

敬礼したかと思うと、美春は意気込んで、どこかへ走り去って行った。

<音夢>

「ねえ、相楽君。美春はどこに向かったの？」

<俊樹>

「ちよっとお使いを頼んだ」

<音夢>

「？」

音夢は首を傾げた。

そんな俊樹の様子を見ていた俊也は、何か作戦でも考えているのか？とも思ったが、勝利しか頭にない俊也にはそんな事、もはやどうでもいい事だった。

つづく

SCENE 39 (前書き)

前話から大分日数が経ちました。

この駄文ばかりの小説を読んで下さっている方々、申し訳ありません。

今回から、小説の書き方を変えました。

少しずつですが、これ以前の話も変えていくつもりですので、良かったら読んでやって下さい。

SCENE 39

照り付ける太陽の下、美春は一人の少年の腕を掴み、俊樹が待つグランドに向かって全力疾走していた。

少年・相沢廣隆は美春に腕を掴まれ、走る　　と言うより引きずられている。

寝起きらしく髪は逆立っており、徹夜で麻雀をしていたオッサンのように眼の下には立派な隈が出来ていた。

「……ちよつと待て美春！」

「待てません！相楽センパイが待つてるんですから、急いで下さいよ相沢センパイ！」

美春に引きずられつつも不満の声を上げる廣隆だが、その声は無情にも美春に一蹴された。

何で、こんな面倒な約束しちゃったんだ、オレは？

事の発端は前日、バイトが終わり帰宅しようとしていた所に、俊樹から助っ人の誘いを受けた。

最初は断わった廣隆ではあったが

『勿論タダで　なんて、ムシの良い事は言わない。　これで手を打たないか？』

そう言つて、廣隆に見せびらかしたのは、一本のゲームソフトだ。パッケージには“ヒーローハンター”と書かれている。

『これを相沢にやるつて言つたら、お前はどつする？』

廣隆は信じられないとでも言いたげな表情で、それを　俊樹を見据えた。

“ヒーロー・ハンター”とは、つい先日発売されたゲームで、プレイヤーは悪の組織の一人となり、ヒーローを倒して世界征服を目指すというモノで、マニアの間では割りと評価が高いが、万人受けはしていないため、販売元が限られている。

それに加え、給料日前という事もあり未だ購入しておらず、入手は半ば諦めていた。

『その助っ人、オレが確かに引き受けた！』

そんな経緯があり、迷う事なく二つ返事で引き受けたのは当然の流れだと言えよう。

……安請け合いしなければ良かったか？

今更ながら後悔する廣隆であつたが、もう後の祭り。
こうなつた以上、行くしかない諦め半分、開き直り半分で俊樹の
待つグラウンドへと向かう廣隆だった。

試合は1 - 0のまま六回を投げ終わり、終盤へと差し掛かっていた。
俊也は俊樹・信幸の二人を危険視し、常に敬遠したため二人は出塁
するものの、その後が続かない。

高校野球の名門、海道学園の二軍とは言つても、そのメンバーは他
の学校に通えば一軍のレギュラーとて簡単に取れる程の実力を有し
ている。

勝つどころか、一点で抑えているのが奇跡だと言えよう。

だがそれもここまで。

まだ四月ではあるが、その気温は真夏と呼べる程に暑い。

炎天下、プレッシャー、その他の色々な重圧が田崎を追ひ詰めた。

田崎は疲弊し、交代すらままならない。

何せ、こちらには海道学園と互角にやり合うだけのピッチャーがい
ない。

否、幾ら人数が少ない風見学園とて、控えの投手がいけない訳ではな
い。

だが、ケガをした三人の内一人がその控えの投手であるため交代が
出来ないのが現状だ。

ギリツと唇を噛み締め、悔しそうにマウンドを眺める俊樹。

一人だけ補欠がいるが、野球初心者だ。

その上、相手が海道学園と聞いてビビりまくっている。

そんなコンディションの中で、彼を試合に出すのは無謀とも言える。
いや、それを言ったらこんな状態の中で海道学園と試合をすること
事態が無謀だ。

しかし、この際賢い事は言ってもらえない。

サードの信幸をピッチャーに代え、田崎の代わりに補欠の1年小笠原をレフト、野球経験者であるレフトの加藤をサードに入れようと考えた俊樹。

正直な話、田崎より信幸の方がスピード・コントロール共に上回っている。

なら何故最初から信幸をピッチャーにしなかったのか？

理由は簡単だ。信幸をピッチャーにしてもよかったのだが、田崎の実力は海道の二軍にどこまで通用するのか試してみたかった、ただそれだけだ。

何本かヒットは打たれはしたものの、それでも一点に抑えられた。

この練習試合を組んだのも田崎と自分自身、そして今の風見学園野球部の实力を知りたかったからだ。

もつとも、ケガ人続出で野球部としての实力は測れなかったが。

ともあれ、田崎と自分自身の实力を知る事が出来た。

それだけで充分。

これ以上、田崎に負担を掛ける訳にはいかない。

覚悟を決め、三人目の打者が三振したのを見届け、俊樹はスッと立ち上がる

「相楽センパ　　イ！」

廣隆の腕を掴み、駆け寄ってくるワンコ。

「美春、ご苦労！」

頭を撫でる俊樹、それに尻尾を振って応じる美春。
それはさながら、ご主人様に頭を撫でられ喜ぶ犬のようだ。

「ホレ、約束のブツだ」

「有り難うございます　！」

俊樹はガサゴソと鞆をあさり、一房のバナナを取り出すと、それを美春に渡した。

受け取った美春はと言うと、ブンブンと激しい勢いで尻尾を振る。栄養補給の為に持ってきたバナナがこんな形で役に立つとは思ってもよらなかったが、なにはともあれ役者は揃った。

俊樹は改めて、俊也は見やる。

その視線に気付いた俊也も俊樹を見据え、続いて廣隆に視線を移した。

『何で、廣隆^{アイツ}がここにいるんだ？』とでもいうかのような表情だ。そんな俊也を他所に、俊樹は審判に交代を告げ守備につく。

「アイツ、寝起きなのに大丈夫なの？」

マウンドに上がる廣隆を見て、眞子が不安そうな声を上げた。

廣隆の目元の隈と櫛も通していないボサボサの髪を見れば、彼が寝起きだという事ぐらい誰にでも容易に想像出来る。

それ故に、眞子は心配になった。

あんな状態でまともなピッチングが出来るのか、と。

そもそも、廣隆にピッチャーなんて大役が務まるのか？

それも、こんな重要な場面で。

そう感じたのは眞子だけではないらしく、その場にいた要　圭一・杉並の両名に至っては何を思っているのかは不明だが　以外的人物はかなり心配そうだ。

廣隆の体育の授業態度は不真面目で、それに加え純一程ではないが、よく『かつたるい』と口にしている。

最も、授業態度は体育に限らず全教科不真面目だが。

そんな奴がピッチャー、しかもこの大事な局面で大役を担う事など出来るのか？

そう疑問を抱くのは当然の事だと言える。

そしてその疑問は俊樹の怒声で、確実なものになりつつあった。

「どこ投げてんだ！構えてる所に投げろ！」

「うるせー、こっちは寝起きなんだ仕方ねーだろ！」

投球練習をしていた廣隆の球は、俊樹が構えていたキャッチャーミットから大きく外れ、彼の後ろのネットに突き刺さった。

後ろに転がった球を取り俊樹は廣隆に球を返すと、それを見た北海道学園側から罵倒、嘲笑の声上がる。

「オイオイ、あのピッチャーかなりノーコンだな」

「ラッキー、バッターボックスにつつ立てるだけで塁に出れる」

「やる気あんのか！風見学園！」

そんな廣隆を見て、乾いた笑みを浮かべる俊也。
“昔の”廣隆ならいざ知らず、“今の”廣隆では海道学園^{ウチ}を抑える
事など出来る訳がない。
そう言いたげな笑みであつた。

海道学園の7番打者が打席に立つ。
バットを肩で担ぎ、構える様子もない。

先程の投球練習を見て構えなくとも出塁出来ると判断したのだろう。
俊樹がサインを出し、キャッチャーミットを構える。
それに頷き、廣隆は大きく振りかぶって第一球を投げた。

「ストライク！」

廣隆の投げた球は、真っ直ぐ俊樹の構えたキャッチャーミットに吸
い込まれるように入っていた。

呆然と立ち尽くすバッター。

驚き、先程までの嘲笑や罵倒の声を失う海道学園。

廣隆の放った球は何の事はない、ただのストレート。

俊樹の構えたキャッチャーミットに入っていた事に驚いた訳じゃな
い。

驚いたのは、彼の放った球のスピードだ。

俊也の放った渾身のストレートのMAXスピードが140km。

対して廣隆の放った球はそれを上回る程の球速で、推定150km
オーバー。

プロでも中々出せる者はいない球速。

その一球で、海道学園のベンチの空気が一瞬で凍った。

「速え……」

不安を抱きつつ、この試合を観戦していた純一は驚愕の声を上げた。無理もない。

いつもやる気のなさそうにだらけている廣隆から、誰が想像出来ようか。

プロ顔負けの球速を放てると。

それは夢や幻、偶然ではないようで、続く二球目も初球と同じスピード、同じコースでキャッチャーミットに球が入る。

バッターの予測した通りのコースに球が来たのだが、予測しただけでは150kmという速球を打ち返す事など出来るはずもなく、バットは虚しく空を切る。

マグレじゃない……！

ベンチから廣隆の速球を見ていた俊樹は、ギリツと唇を噛み締めた。完全にタ力を括っていた。

廣隆に海道学園は抑えきれない、と。

舐めて掛るな。

俊樹の中の何かが警鐘を鳴らす。

先程の乾いた笑みから一転し、廣隆を真っ直ぐに見据えた。

その目は強敵を見るかのように鋭いモノだ。

「そういえば、相沢って右利きじゃなかったっけ？」

続く八番打者を抑えた所で眞子が疑問の声を上げ、純一は『そう言われれば』とそれに応じた。

眞子の言うように廣隆は右利きで、グローブは左手に着けるのが普通なのだが、今の廣隆は右手にグローブを着け、左手で投げているとすれば、ホントは左利きなのではないか？
と言う結論に至るのは当然の事だろう。

「なあ榊、相沢ってホントは左利きなのか？」

そう尋ねた純一に要はチラッと一瞥し、再び視線を廣隆へと戻した。

「いや、相沢は右利きだ」

昔から廣隆を知っている要が言うのだ、まず間違いないだろう。ならば何故、廣隆は左で投げているのか？

純一がそう問掛けようとして、要がソレを遮った。

「相沢は、元々右投げだったんだけど、ガキの頃に右肩を壊したんだ。それ以来、左で投げてるんだよ」

「相沢センパイって、野球少年だったんですか？」

意外そうな声を上げ、美春はマウンドに立つ廣隆に視線を移した。その表情は、今の廣隆からは想像出来ないとでも言いたげだ。

「想像出来ねえ……」

「相沢君に失礼ですよ、兄さん」

純一は呟きを洩らし、音夢がそれを諫めた。

「だが、音夢。お前は想像出来るか？相沢が野球少年だったって」

「う……それは……」

音夢は口ごもった。

正直に言うのならば、想像出来ない。

それは仕方のない事だろう。

純一に負けず劣らずの不真面目な廣隆に、元野球少年だと誰が想像出来るようか。

「ストライク！バッターアウト、スリーアウトチェンジ！」

「おっ、また三振。意外と凄いヤツだったんだな、相沢って」

7回を三者連続三振に切って取った廣隆。
そんな廣隆に、工藤は驚きの声を上げる。

「最初はどうかと思ったが、ボールも伸びてるしいい調子だぞ」

ベンチへと向かう途中、俊樹は廣隆に近寄り左肩をポンツと軽く叩いた。

「そりゃ、どーも」

何ともやる気のない声を上げる廣隆だが、その表情は声とは裏腹にやる気満々といった感じで、常に不真面目で、やる気の欠片も見せない彼にしては珍しい表情だ。

俊樹は右手をグツと握り締め、廣隆に突き出す。

それを見た廣隆も俊樹同様に左手を握り締め、突き出された拳を小突いて返した。

それは二人にとっては挨拶や儀式のようなモノで、特に何の意味もないのだが、これをやらなければ、何ともしっくりこないのだ。

そのため、この行為に何の意味もないという事は解ってはいるが、ついやってしまう。

言わば、クセやジンクスの類のモノだ。

そんな二人を、苦虫を噛み潰したかのような眼で見つめる者がいた。俊也である。

先程までの余裕の笑みは既に身を潜め、鋭い視線を二人に向けマウンドに向かう。

気にいらない

何故かそんな思いが、俊也を支配した。

何がそんなに気にいらなかったのか？

そう自問しても、明確な答えが導き出される事は無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8481a/>

D.C. ~ refrain love stories ~

2010年10月31日03時19分発行